



報告書

明治維新の力・北前船で
広がる交流の輪
～令和の新たな輪は海を越えて～

北前船寄港地フォーラムin鹿児島

会場

SHIROYAMA HOTEL kagoshima

2020

2/1 (土) 欽迎交流前夜祭

2/2 (日) フォーラム・レセプション

2/3 (月) エクスカーション



【主催】「第29回北前船寄港地フォーラムin鹿児島」実行委員会

鹿児島市、(株)南日本新聞社、(株)南日本放送、鹿児島県町村会、学校法人津曲学園、全日本空輸(株)鹿児島支店、日本放送協会鹿児島放送局、
(公財)鹿児島観光コンベンション協会

【協力】(一社)北前船交流拡大機構、(一社)鹿児島県建設業協会鹿児島支部、鹿児島県港湾漁港建設協会、鹿児島相互信用金庫、

(株)鹿児島銀行、(株)CSS、(株)島津興業、(株)西部防災、(株)大広九州、(株)野崎美工舎、(株)風月堂、(株)フタバ、(株)南日本総合サービス、
(株)山形屋、九州旅客鉄道(株)、(公財)鹿児島市公園公社、(公財)鹿児島市水族館公社、(公財)鹿児島まちづくり土地区画整理協会、
合名会社明石屋菓子店、城山観光(株)、全日本空輸(株)、南海食品(株)、日本ガス(株)、日本航空(株)、本場大島紬織物協同組合、(有)馬場製菓、
いちき串木野市、指宿市、鹿屋市、霧島市、薩摩川内市、曾於市、垂水市、枕崎市、南さつま市、屋久島町

【事務局】鹿児島市観光プロモーション課



第29回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島 プログラム

■2月1日(土) SHIROYAMA HOTEL kagoshima 2F「クリスタルガーデン」

歓迎交流前夜祭

18:30	開会の辞	一般社団法人北前船交流拡大機構 理事長	浜田 健一郎 氏
18:35	開会挨拶	実行委員会会長（鹿児島市長）	森 博幸
		一般社団法人北前船交流拡大機構 評議員議長	石川 好 氏
18:50	来賓祝辞	国土交通省観光庁長官	田端 浩 氏
18:55	鏡開き・乾杯	一般社団法人北前船交流拡大機構 会長	岩村 敬 氏
	～歓談～		
19:10	歌唱	城 南海 氏（歌手）	
	スピーチ	株式会社 ANA 総合研究所 代表取締役社長	岡田 晃 氏
19:30		北海道旅客鉄道株式会社 代表取締役社長	島田 修 氏
		東映株式会社 代表取締役社長	多田 憲之 氏
		沖縄県副知事	謝花 喜一郎 氏
	閉会挨拶	枕崎市長	前田 祝成 氏
20:20		指宿市長	豊留 悅男 氏
		南さつま市長	本坊 輝雄 氏

■2月2日(日) SHIROYAMA HOTEL kagoshima 4F「エメラルド」

フォーラム

第 1 部	10:30	オープニングアトラクション「維新 dancin' 鹿児島市～season2～」	鹿児島実業高校男子新体操部
	10:40	開会挨拶	一般社団法人北前船交流拡大機構 評議員議長 石川 好 氏
		パネルディスカッション テーマ「北前船と鹿児島」	
		コーディネーター 志學館大学 教授	原口 泉 氏
	10:45	パネリスト	西郷南洲顕彰館 館長 德永 和喜 氏
		鹿児島市維新ふるさと館 前特別顧問 福田 賢治 氏	
		尚古集成館 館長 松尾 千歳 氏	
		西郷隆盛研究家 安川 あかね 氏	
	12:15	～休憩～	
	13:30	アトラクション 舞踊「北前船が伝えた“九州ハイヤ節”ここ薩摩に集結する」	
第 2 部		歌唱：城 南海 氏、踊り：宮坂 一樹 氏・宮坂 麻未 氏・さわやか会、監修：花柳 糸之 氏	
	13:50	主催者挨拶	実行委員会会長（鹿児島市長） 森 博幸
		一般社団法人北前船交流拡大機構 理事長 浜田 健一郎 氏	
	14:00	来賓紹介・祝辞	衆議院議員 森山 裕 氏
		国土交通省観光庁長官 田端 浩 氏	
	14:20	～休憩～	
	15:00	基調講演① テーマ「D&S列車で九州を元気に！」	
		九州旅客鉄道株式会社 代表取締役社長 青柳 俊彦 氏	
	15:30	基調講演② テーマ「なぜ薩摩は強い国か」	
		歴史家 磯田 道史 氏	
	16:30	～休憩～	
		基調報告 テーマ「中国等海外との交流拡大・産業振興」	
	16:45	学校法人津曲学園 鹿児島国際大学 国際文化学部教授 戰 廉勝 氏	
		国土交通省観光庁 観光資源課長 河田 敦弥 氏	
		鹿児島相互信用金庫 海外・貿易相談所 所長 村田 秀博 氏	
	17:25	総括（閉会あいさつ） 公益社団法人日本観光振興協会 理事長 久保 成人 氏	

■ 2月2日(日) SHIROYAMA HOTEL kagoshima 4F「エメラルド」
レセプション

19:00	オープニングアトラクション	鹿児島市役所おごじょ太鼓 千文会
19:10	実行委員会紹介・挨拶	実行委員会会長（鹿児島市長） 森 博幸
19:15	来賓祝辞	衆議院議員 富田 茂之 氏 国土交通省観光庁 観光地域振興部長 村田 茂樹 氏
19:25	来賓紹介・乾杯	鹿児島市議会議長 山口 たけし 氏
	～歓談～	
19:50	アトラクション	鹿児島市役所おごじょ太鼓 千文会
20:00	セレモニー	山形県からの参加者紹介、記念品贈呈
	スピーチ	鹿児島県知事 三反園 訓 氏 衆議院議員 宮路 拓馬 氏 九州旅客鉄道株式会社 代表取締役社長 青柳 俊彦 氏 歴史家 磯田 道史 氏
20:20	今後の開催地挨拶	島根県浜田市 秋田県、秋田市
20:40	閉会挨拶	一般社団法人北前船交流拡大機構 理事長 浜田 健一郎 氏
20:50		

■ 2月3日(月)
エクスカーション

・南薩コース	双剣石（南さつま市）、枕崎お魚センター（枕崎市）、 開聞岳・瀬崎太平次像・砂むし温泉（指宿市）
・離島（屋久島）コース	紀元杉・屋久島環境文化村センター（屋久島町）



SHIROYAMA HOTEL kagoshima

主催者挨拶



「第29回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」
実行委員会 会長／鹿児島市長

もり ひろゆき
森 博幸

皆さん、こんにちは。「第29回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」の実行委員会の会長で鹿児島市長の森でございます。

実行委員会の会長として、一言ご挨拶を申し上げます。

北は北海道から南は沖縄まで、全国各地の北前船で結ばれた多くの皆様、ここ鹿児島にお越しいただきましたことに、心から歓迎申し上げますとともに、多くの市民の皆様方にもこのフォーラムにご参加をいただき、誠にありがとうございます。

また、国会開会中の、大変お忙しい中にも関わらず、衆議院議員で、自由民主党の国会対策委員長でもいらっしゃいます森山先生にもご出席を賜り、感謝申し上げます。ありがとうございます。

そして観光庁長官の田端様にもご出席をいただきまして、このフォーラムに花を添えていただきありがとうございます。

今回、中国・大連市等から多くの皆様方をお迎えをする予定にしておりましたが、新型肺炎の発生により、残念ながら参加が叶わなかったところでございます。

今後ともフォーラム参加などを通じまして、引き続き大連市等との交流を深めてまいりたいと考えております。

さて、平成19年から始まった本フォーラムは、海を越えて発展を続け、今では45の自治体が日本遺産に認定されるなど、北前船をキーワードとした取り組みは、地方創生を進める上でも大きな広がりをみせております。

ここ鹿児島におきましては、かつて薩摩藩が北前船により調達した昆布を、琉球を通じて中国に輸出すること等により財政を立て直し、後の明治維新につなげたとされております。

北前船なくしては、明治維新、ひいては日本の近代化は成しえなかつたかもしれません、九州初となる本市でのフォーラム開催は誠に意義深いものがあり、大変光栄に存じております。

このあとのフォーラムでは、「明治維新の力・北前船で広がる交流の輪」をテーマに、JR九州の青柳俊彦社長や歴史家の磯田道史氏による基調講演をいただくほか、中国等との海外交流、産業振興に関しまして、有識者の方々によります基調報告などを行います。

本フォーラムを通じまして、北前船への理解が深まるとともに、各自治体・関係団体のさらなる発展につながるものと大きく期待を寄せており、多くの皆様方にとりまして、実り多きフォーラムになるものと確信しております。

本市としましては、このフォーラムの盛り上がりを、オリンピックイヤーの本年、48年ぶりの地元開催となります「燃ゆる感動 かごしま国体・かごしま大会」にもしっかりとつなげ、“鹿児島ファン”の輪を広げ、令和時代におけるさらなる飛躍を目指してまいりたいと考えておりますので、引き続きご協力よろしくお願い申し上げます。

結びに、本フォーラムの開催に際し、各面よりご尽力をいただきました北前船交流拡大機構の皆様方をはじめ、ご協力いただきました企業・団体など、多くの関係の皆様方に心から感謝を申し上げますとともに、お集まりの皆様方の今後ますますのご活躍を祈念申し上げて、開会にあたりましての挨拶とします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

主催者挨拶



一般社団法人北前船交流拡大機構
理事長

はまだ けんいちろう
浜田 健一郎 氏

北前船交流拡大機構理事長の浜田でございます。
大連市からメッセージと報告を預かりましたので、発表します。

一つは、大連市として、名誉ある「友誼賞」を森市長に贈呈したいという決定を大連市として行つたいうことでございます。今回、持ってくる予定が、お持ちできませんでしたが、ぜひ、森市長におかれましては、大連市の好意を受け止めていただきたいと思います。

メッセージを読み上げます。

尊敬する鹿児島市長森博幸先生をはじめとする鹿児島大会への参加の皆様、新春の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。貴市のますますのご発展をお祈りいたします。

また、これまでの大連市に対しての友情と大連の発展につきましてのご関心とご支援に心から感謝を申し上げます。

「北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」の開催にあたり、私は大連市代表団と大連市文化交流局を代表しまして、熱烈にお祝いを申し上げます。

2018年、北前船寄港地フォーラムと中日観光大連交流大会が大連で共催されて以来、双方は経済、文化と観光などの広い分野で深く交流と協力を続けてまいりました。

今回の鹿児島大会に出席するため、また、もっと多くの日本の地方都市との交流を拡大するため、大連市は中国遼寧省の沿岸経済圏6都市の先頭として、多くの努力と十分な準備を行ってきましたが、新型コロナウイルス

により、非常に残念でありますが、今回の訪問をキャンセルさせていただきます。ただし、それによって大連と鹿児島の友好関係が弱まるではなく、中日友好交流の強い意欲にも全く影響はないと信じております。

最後に、鹿児島大会の成功と皆様のご清祥をお祈り申し上げます。引き続き大連の発展にご関心とご支援をいただくようお願い申し上げます。

大連の最も美しい季節の5月に大連に訪問されることを心よりお待ち申しております。大連でお会いできる日を楽しみにしております。

大連市 鹿児島大会参加予定者代表 于秘書長

以上、大連のメッセージを読み上げましたが、私達機構としましては、交流人口の拡大が、日本の地方都市の発展に資するとの思いで、今回の新型肺炎に負けることなく、今回のフォーラムを成功させていただきたいと思っております。

当分はこの新型肺炎の影響で観光は停滞するかもしれません、先を見据えて、終息した後には、交流人口の拡大を目指す動きをしてまいりたいと思います。

そういう意味では、今日のフォーラムは、大変重要な大会になると思いますので、ぜひ、よろしくお願いしたいと思います。開催おめでとうございます。



一般社団法人北前船交流拡大機構
評議員議長

いしかわ よしみ
石川 好 氏

本日の大変素晴らしいフォーラムの開催にあたり、まことに主催者側の一員として、皆さんに深くお礼を申し上げます。

また、今回ほどの多くの参加申し込みがあったのは北前船寄港地フォーラム始まって以来のことです。

盛況ということで、断った人が大変多かったと推測しますが、何より喜んでいるのは、ここ鹿児島市長の森さんだと思っております。

申しますのも、実は青森県野辺地町での北前船寄港地フォーラムの開催の折に、鹿児島から森市長が来られまして、鹿児島でも開催したいという話があったのです。

私はその時に、多少は北前船についての知見を持ち合わせていますから、鹿児島での開催は相当難題と申し上げたところ、いろんな歴史事情の上で、鹿児島も北前船とは縁があるとのことです。

鹿児島でいつか開催しましょうと約束しまして、それ以来、森市長は、開催地に足を運んでくださいまして、結果、ひとえに森市長の熱意と情熱のおかげで本日の開催の運びになり、まず森市長にお礼を申し上げる次第でございます。

さて今回は、今まで例のないフォーラムになると思っています。

薩摩、鹿児島が北前船とどんな関係があるのだろうと、今回、その謎解きが行われるわけですが、実はこの北前船フォーラムの第1回目を庄内・酒田で行いました。

今回、庄内地方と薩摩が実に深い縁で結ばれているということが分かってきました。直近では、酒田に薩摩の

船がたくさん入ってきた資料が見つかっております。その当時は山形弁も大変難しいし薩摩弁も難しく、薩摩から来た船頭さん達が、迎える庄内でどんな言葉で喋ったのかというと、多少の行き違いが起こっているみたいです。その資料には、薩摩のことを「サスマ」と書かれています。おそらく庄内地方の人にとって、薩摩の船が来ると、薩摩が「サスマ」に聞こえ、この船をみんな「サスマ」と書いてあることが分かりました。

そういうことがありますて、庄内地方を中心としたものが、日本海を経由して、鹿児島に伝わってきました。

ある歴史家が「昆布ロード」の本を書いたり、明治維新は北前船によってたらされたもので薩摩が資金を蓄え、強い軍事力を持っていったと言う方が増えています。そこからさらに琉球を経由して福建省に入り、結果、北前船の產品が中国に渡る一大航路が出来上がったということだと思います。

そして、本日も庄内地方から30数名の方々が参加しております。これも南洲記念館が酒田にあり、そういう交流がずっとありました。明治維新の前の戦で、庄内藩は戦い、負けて大変な目に遭うはずでけれども、その時西郷隆盛と黒田清隆、大山格之助などが直ちに庄内に入りまして、穩便な措置がとられる事実がありました。それに感謝したということも含めて、南洲語録を庄内藩士が作りました。

西南戦争の時には、相当の方が行きたかったらしいですが、もしも西南戦争に庄内藩士が多く参加すると、まずいことになるわけですから、庄内藩は止めて、たしか2名ぐらいが参加して戦死し、ここ鹿児島の地に弔われ

ました。そういう縁も深いわけです。

薩摩と庄内・酒田の深い結びつきが分かるのですけれども、ただ、私どもが注意しないといけないのは、この北前船に知られていない話がたくさんあります。

一つ例を申し上げますと、酒田の郷土史家の先生が書かれた本にあります、本間家に縁のある方が、大変な語学の達人で、長崎でフレデリックという方から英語を習って、薩摩に来て開成所で英語を教えています。その時に薩州商社、今でいう株式会社を作る計画に参画して、成功すればと、日本で最初の株式会社を庄内から来た本間家の血を引く人が英語を教えながら考えました。この方は、後に江戸に戻って、勝海舟の英語の先生をしたように、庄内と薩摩は、すごく縁があります。北前船の縁で人間関係ができていったと思っております。

この北前船のこと、特に鹿児島とか琉球を視野に入れた議論をしていくと、日本の歴史を書き換えるようなことがあると思います。薩摩の成功は、北前船に関わる貿

易だったのです。

一つは、薩摩が行った事があまり知られなかった理由は、どちらかというと密貿易的などころがあり、なかなか資料とか物語にならなかったからです。

北前船の様々な物語が世界中に拡大していく可能性がありますので、学習しながら、この北前船寄港地の物語を盛り上げていきたいと思っております。

以上が挨拶です。ありがとうございます。



来賓祝辞



衆議院議員

もりやま ひろし
森山 裕 氏

皆様こんにちは。衆議院議員の森山裕です。

29回という素晴らしい歴史を重ねて、今回「北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」が、この城山の地で開催をされますこと、本当に喜ばしく思います。

実行委員会の皆さんや、ご協賛、ご協力をいただいている皆様に心から厚くお礼を申し上げる次第です。

ここ城山は、薩摩の国にとっては、まさに聖地です。間違いなく西郷隆盛公も大久保利通公も調所広郷公も、この城山の地に立って、錦江湾を眺めながら、「城山高い高い泣こかい飛ばかい泣こよかひつ飛べ」と言って、重大な決断をしてこられた場所だと思います。

我々は、歴史を正しく見るということが、今、非常に大事なことなのではと思っています。

鹿児島は北前船の寄港地ではありませんでした。しかし、北前船の交易を通じて、薩摩の国は財政を立て直してきたのかもしれません。また、財政を立て直すために、奄美の黒糖が大きな貢献をしたこと、その通りだと思います。薩摩の財政を立て直すために、調所広郷公は、大変な努力をされました。

我々は、歴史を正しく評価をしていくということは、今、本当に大事なことなのではと思っています。今回のフォーラムを通じて、薩摩の偉人達の功績を正しく県民が理解をする機会になれば素晴らしいことだと思います。

鹿児島は、まだまだ伸びしろがすごくあると思います。農林水産物でも、特に農業産出額では、平成29年、平成30年、続けて北海道に次いで日本で2番目になりました。

シンガポールに行かれた方々がよく言われますが、シンガポールは、焼き芋の大ブームだけれども、そのほとんどが鹿児島産のサツマイモだと聞いたと、誇りにされます。デパートに行って、食品売り場に行くと、和牛

のコーナーがものすごく広く、どこの和牛かなと思ってよく見てみると、オーストラリアの和牛でした。日本の牛肉はどこかと思ってみると、一番良い場所に、曾於牛というコーナーがあって、曾於の名前を取って、曾於牛が本当の和牛のコーナーになっています。私も行ってきました。そこの品物を売られる方に向こうのコーナーの和牛と曾於牛は何が違うのかと聞きますと、向こうの牛肉とこっちの牛肉は全然別物だと言います。サイコロ状にした牛肉を試食をするコーナーがありますが、ここで食べた人は必ず曾於牛を買って帰る、そしてまた必ず買いたいにきてくださるという話をされます。

我々鹿児島は、多くの誇れるものを持っています。それは北前船の精神によって、さらに世界に広げていくことこそが大事なのだと思います。

森市長にご努力をいただいて、鹿児島市役所の職員の皆さんも本当に頑張っていただいて、関係の皆さんとの理解とご協力の下に「北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」が開催をされましたこと、本当に嬉しく存じます。

おそらくこのフォーラムを通じて、鹿児島県民の意識も変わらるだろうと思いますし、鹿児島がさらに発展をする一つの起点になるのではと思います。

また、それぞれの自治体との交流が、さらに高まっていくのではないか、ただ単に国内だけではなくて、先ほど浜田理事長からお話をいただいたように、大連を含めて、近隣諸国との交流がさらに深まっていくのではと思います。

本フォーラムのご成功を心からお喜びを申し上げ、今後とも皆様方と一緒に鹿児島県の発展のために、日本の発展のために、頑張っていきたいとあらためて思うことでございました。

ご案内をいただき、大変ありがとうございました。

来賓祝辞



国土交通省観光庁長官

たばた ひろし
田端 浩 氏

観光庁長官の田端でございます。

この度は、「第29回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」が、盛大に開催されましたこと、心からお慶び申し上げます。

また、本日お集まりの皆様方におかれましても、平素より観光行政にご理解ご協力を賜りまして、心より御礼を申し上げます。

今回の実行委員会会長をお引き受けいただき、準備にご尽力をいただきました実行委員長の森鹿児島市長をはじめ、鹿児島市の皆様、北前船交流拡大機構の皆様に、心より御礼を申し上げます。

今回、多くの地域の歴史や文化に影響を与えたといわれます北前船をテーマとしました北前船寄港地フォーラムが、初めての九州、鹿児島市で開催されるということで、フォーラム開催地が、北海道から中国地方に至るまでの日本海沿岸の各都市、また、瀬戸内海沿岸の都市、ついには九州まで拡大しました。

北前船寄港地フォーラムは、回を重ねるごとに参加者が増え、これまでの開催地の皆様が集う場となり、交流が育まれてきました。地域間交流のモデルとして、全国に誇れる取り組みであると考えております。

これもひとえに開催を支えられました各都市の実行委員会の皆様をはじめ、北前船交流拡大機構の皆様、本日ご参集いただいた皆様のご尽力の賜物であります。あらためて心より御礼を申し上げたいと思います。

かつて財政事情の苦しかった薩摩藩が、北海道から北前船で調達した昆布を入手し、琉球を経由して輸出するということで財政を立て直したことが明治維新の原動力となったと伺っております。

鹿児島には、シンボルであります桜島をはじめ、世界自然遺産であります屋久島に加え、天文館や指宿の砂風呂など、多様な観光資源を有しており、明日のエクスカーションにおいても、存分に鹿児島の素晴らしい景色をご堪能いただけるのではないでしょうか。

観光庁としましては、北前船の寄港地間の交流がますます拡大し、ひいては各地域の発展に繋がるよう、様々

な面から皆様方の取り組みを支援してまいりたいと考えております。

昨年は、訪日外国人旅行者数3,188万人、外国人旅行消費額4兆8,113億円を記録し、過去最高で推移しております。本年、2020年は、目標達成の大変な年でございます。この目標をいろいろ達成していく、この観光の力をどんどん浸透していくには、地方部への誘客が重要となってきております。

このフォーラムでは、様々な方々からの発表がございますが、ぜひ、皆様の地域の観光資源の磨き上げなどに生かしていただければと考えます。

また、多くの国々との相互の交流が、非常に重要なになってまいります。私どもとしましても、2020年までに日本のアウトバウンドを2千万人にする目標を掲げてまいりましたが、1年前倒しで2019年に達成できました。地域間の交流、国内でもそうですが、今後、いわゆる諸外国との相互の国際交流を力強く進めていきたいと考えています。

今は、ご指摘もありました新型コロナウイルスの事案で、厳しい状況にございます。人類の医学を結集した上で、政府や民間あげて取り組んでいく大きな試練でありますが、乗り越えていけると考えます。落ち着きまして安全宣言できるタイミング以降、急速な回復に向けてリバイタリゼーションを進め、観光の仕事や観光行政によって地域間交流、国際交流が進み、地域の活性化に繋がっていくと思っています。私どももその方向に向かって、全力を上げて取り組んでまいりますので、本日ご参画いただいている各地域の皆様、ご参集いただいている参加者の方々と力を合わせて、しっかりと取り組んでいきたいと考えています。

本フォーラムが成功裏になりますよう祈念しまして、私からのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

コーディネーター



志學館大学 教授

はらぐち いづみ
原口 泉 氏

パネリスト



西郷南洲顕彰館 館長

とくなが かずのぶ
徳永 和喜 氏



尚古集成館 館長

まつお ちとし
松尾 千歳 氏



鹿児島市維新ふるさと館 前特別顧問

ふくだ けんじ
福田 賢治 氏



西郷隆盛研究家

やすかわ あかね
安川 あかね 氏

司会者

「北前船と鹿児島」をテーマに、鹿児島を代表する歴史が専門の皆様から、貴重なお話をいただきます。

はじめに、パネリストの皆様をご紹介します。

西郷南洲顕彰館館長 徳永和喜様、維新ふるさと館前特別顧問 福田賢治様、尚古集成館館長 松尾千歳様、西郷隆盛研究家 安川あかね様です。

そしてコーディネーターは、志學館大学教授 原口泉様です。

ここからの進行は、原口様にお願いします。

**原口氏**

北前船と薩摩藩の関係を「昆布を売った薬売り」の題でNHKが放送したのは三十数年前のことでした。北前船交流拡大機構の議長の石川好さん、我が郷土の先輩でもいらっしゃる理事長の浜田健一郎さん、そして鹿児島市の森市長などのおかげで、鹿児島の地でこのフォーラムが実現できましたこと、心よりお慶び申し上げます。

まず福田先生、北前船を鹿児島の皆様に説明しなければと思いつますので、お願いします。

福田氏

北前船は、江戸中期から明治30年頃までが盛んでしたが、明治30年を過ぎると交通、特に鉄道など陸路の発達や西洋の船などの参入もあり、儲けも少なく危険性もあることから、明治30年代頃には衰退しました。

日本の海運ですが、昔は特に東北地方の米を船で江戸に運ばなければなりませんでした。陸路は道路の整備も進んでいなかったため、大量の荷物を運ぶには海路が主でした。当初から西廻り・東廻りがありましたが、特に太平洋岸を通じて江戸に米を運ぶ航路は危険が伴いました。後に河村瑞軒という人が幕府の命を受け、港の整備をはじめ安全に米を運ぶ航路を開発しました。

太平洋岸を通り江戸へ運ぶ航路は、房総半島の所が特に危険でしたので、主に銚子で陸揚げし、利根川を利用して江戸へ運んでいました。河村瑞軒は房総半島沖を遠回りし、下田で風待ちした後、江戸に直接船で運ぶ航路



を開発しました。

また、西廻りで米を運ぶ航路として、敦賀あたりで陸揚げし、琵琶湖等を通じて大津から大坂へ運ぶルートがありました。ただ、これは途中で荷崩れしたり、運送費が高くついたり、また日数もかかりました。このようなことから開発されたのが、敦賀あたりで陸揚げせず、下関に回って瀬戸内海を通り大坂へ行く航路の開発です。

北前船は、松前から大坂までの経路であり、北海道の産物や東北の米などを運ぶと同時に、大坂や瀬戸内海から塩、酒、雑貨類、また、北海道には水田がなかったため、筵、縄なども運んでいます。

大事なことは、船主から預かった品物を運ぶだけでなく、寄港地で安いものがあれば買い、高くて積荷が売れれば売るということを繰り返しながら、松前と大坂の間を行き来したことです。当初は近江商人が、後には一攫千金を夢見て多くの人が船を持つようになりましたが、「板子一枚下は地獄」と言われるくらい遭難の危険があり、命をかけて携わりました。

この船は江戸時代後期には、「千石船」あるいは「弁財船」とも呼びましたが、一艘造るのに何百両とかかったそうです。一航海でだいたい一千両くらい儲かったことから、それを夢見て千石船を購入し、また、そういう身分になりたいと願ったのが北前船に携わる人々でした。

原口氏

次に、昆布、密貿易、石見銀山といったことを徳永先生お願いします。

徳永氏

昆布は北海道でしか採れません。どのような形で薩摩に入り、中国に輸出されたか、いわゆる琉球口貿易を説明します。干鮑、煎海鼠(干しなまこ)、鰯鰆(ふかひれ)を俵に詰めて輸出する海産物ですので、俵物三物といいます。長崎貿易の中国商人団が、長崎で日本から輸入しても、すでに薩摩から琉球口に入って中国全土に売り渡って売れない、中国から日本に持ってきてても、すでに



琉球口から薩摩に入って日本全国に売られていると、中国商人団が幕府に訴えています。加えて、品が安い、品質が良い、流通が早い、この三拍子が揃いますと、幕府が正式に認める長崎貿易での中国商人は貿易が成り立たないとの訴状が記録されています。薩摩の場合、新潟港を中心に、6年間で6艘入港しています。隠して持ってくる品物が漢方薬や光明朱等でした。その光明朱は、東北の会津塗・北陸の輪島塗、信州の木曽塗と3つの日本を代表する所に薩摩の光明朱が入っていました。琉球を介した琉球口貿易で薩摩は入手していました。

薩摩藩の密貿易といわれますが、薩摩藩は幕府から輸入して良いと許可（長崎奉行の藩主光久宛書状）されており、決して密貿易ではありません。ただ、許可以外のものを取り扱ったり、許可された量をオーバーしていたのが、少し悪かったです。江戸初期は3種でしたが、調所広郷の活躍により幕府から16種の許可を貰い、貿易できる品物がかなり増えました。調所の改革で大事なことは、大坂市場で薩摩藩の専売品（黒糖やウコン等）が値崩れしないよう、自前の船団を持つことでした。藩がお金を貸してもなかなか造られなかったのですが、船を造ったら奄美と大坂の市場を5、6回行ったら造船料が回収できると藩の保証を付したところ、申し込みが増え、鹿児島の船持ち商人の誕生と海運盛衰の時代に入りました。

原口氏

薩摩藩のロジスティックス（物流）の整備で、濱崎太平次などの海商に船を作らせました。造船、航海、貿易と、まるで大航海時代のイベリア2国のような国策を行いました。そして、このフォーラムの協賛をされている山形屋も北前船で呉服を持ってきて、高島屋も藍の職人として鹿児島に呼ばされました。この2大デパートも、北前船がもたらした商業文化ということがいえます。

次に、尚古集成館の松尾館長、集成館事業などについてお願いします。

松尾氏

幕末に日本で一番工業が進んでいたのは鹿児島でした。薩摩藩は非常に変わった藩で、南北1,200キロあります。今の鹿児島県、沖縄県全域と宮崎県の約3分の1が薩摩藩で、鹿児島を起点に最南端琉球へぐるっと反対方向へ持っていくと、新潟・福島ラインに到達します。このような藩は他にありません。さらに今の沖縄県の部分は、名目上は中国の皇帝が任命する琉球国王が統治する異国で、藩の中に外国がある状態です。藩の中に外国がある藩も他にありません。ここでは幕府公認の下で中国貿易が行われ、薩摩藩は鎖国していませんでした。薩摩藩は海洋国家なのです。鎖国令が出る前は、目の前の海は外国船で溢れ、いたる所に外国人街があるような状況でしたが、鎖国令で南九州から外国船、外国人が姿を消しました。しかし、沖縄はその対象外で、海外との交易が続いている状態でした。外国の窓口は長崎しかないと誤解されていますが、薩摩にも開いていました。薩摩藩は北は北海道から南は沖縄に至るまでの海上交易路で結ばれており、その延長線上に中国がありました。

また薩摩の石高ですが、正式には72万8千石です。他の藩は白い米で計りますが、薩摩藩は粉を付けて計り、粉を取るとだいたい半分の35万石くらいです。それでいて士族の割合は、日本の他の地域は5%、薩摩藩は26%に達していました。薩摩藩を今の企業に例えると粉飾決算で売上を倍にして、従業員を基準の5倍抱えているようなものです。それで藩財政が成り立っていたのは副収入が多かったからです。その最大のものが琉球口貿易でした。琉球口貿易以前も勘合貿易や、倭寇が関わる外国との交易が盛んな所でした。島根にある石見の銀の窓口も鹿児島でした。数年前に石見に行って驚いたのは、奄美の鶏飯や、鹿児島の郷土菓子「げたんは」と同じものがありました。鹿児島と石見は昔から繋がっており、藩財政を支えた大金山・山ヶ野金山も石見の山師が見つけています。石見で銀が採れなくなると、代わりに北海道の海産物、俵物が輸出されました。北前船で北海道の船は直接鹿児島に来ていないと思いますが、積み荷の多くは大坂などを経由して薩摩に運ばれて、琉球を





経由して中国に輸出され、大量の物資が鹿児島経由で外国に流れました。長崎以外、鹿児島は海外交易で重要な役割をしていたということです。

鹿児島の歴史は日本国内だけを見ていては理解できません。世界史にはみ出た雄大な歴史が育まれていました。例えばペリーが来て鎖国の眠りから目覚めたのは、日本の大部分では正しいのですが、薩摩ではそうではありません。ペリーが来た頃、鹿児島の磯には集成館という洋式工場群の建設が始まり、桜島では昇平丸という洋式軍艦の建造も始まりました。外国の窓口が長崎というのは、徳川幕府が位置づけただけで、鹿児島も窓口でした。ヨーロッパ人は南蛮人と言われたように東南アジアから北上してきました。中国から台湾、沖縄、奄美の島々を北上してきたため、日本の南端にある鹿児島・南九州が鉄砲伝来やキリスト教の舞台となりました。

日本その他地域とはやや異なる歴史・文化・技術が育まれていたのです。船も他地域とは少し違っていたようです。東京国立博物館に和船の模型がありますが、薩摩型というのが別にあったようです。外洋航海する薩摩の船は、他の地域よりも波に強い、崩れにくい、がっちりした構造だったと推定されています。

原口氏

江戸時代に火縄銃をずっと作り続けていたのは薩摩藩だけで、江戸時代の薩摩藩は、馬と銃と外洋船と火薬、この4つを常にメンテナンスしていました。

松尾氏

19世紀、オランダのように幕府の命令に従う国の船は、鹿児島の沖を素通りして長崎に行きました。イギリスやフランス、アメリカは、幕府の命令を何とも思っていないなくて、イギリス船などは薩摩藩領を素通りせず薩摩藩の港に入ってきた。他の地域よりも早く薩摩藩は外圧に晒され、大変な時代がきたと思い知らされていたのです。このため集成館事業、ヨーロッパの科学技術を導入した近代化もいち早く薩摩藩がリードしました。まだ鎖国体制下にあったためオランダの本をヒントに日本

の技術を融合させ近代化・工業化を図りました。こうした経験がありますから、鹿児島の技術者は部品の一つ一つまで、なぜこういう形か、どういう役割を果たすか理解しています。外国から船や機械などを輸入することができるようになった時、この時の経験が生きて、すぐに使いこなして、簡単な修理、改良をすることができました。見たこともないものを、オランダの本を頼りに、自分たちで造り上げていくという、たいへんな苦労をしましたが、そのような苦労の積み重ねが今の技術立国に繋がっています。その知識・経験が、北前船が通ってきた道を逆走するような形で全国各地へ伝わりました。

北海道の開拓も薩摩絡みです。北海道に人が住んでいないとロシアに取られると、島津斉彬が開拓の必要性を訴えました。その思いを受け継いだ薩摩の人々が、鹿児島の知識・経験を北海道に持ち込んで開拓に従事しました。例えば小樽の古い石倉は、鹿児島本港区の石倉と瓜二つです。鹿児島の石工が北海道に行ったのではと思っています。

北海道の開拓は西郷も関わっています。島津と徳川は、関ヶ原や戊辰戦争で戦って、昔から仲が悪かったと誤解されますが、実際は違います。幕末の薩摩藩の方針は、幕府だの藩だの言っている時代ではない、日本が一丸となってイギリスやフランスに対処すべきだという考えでした。幕府や藩の枠を打ち破って新しい国家にしたのが明治維新で、基本的な考えを最初に示したのが島津斉彬、遺志を受け継いだのが西郷隆盛です。西郷が目指したもの、決して幕府を倒すということではなく、日本を生まれ変わらせることで、もっと多くの方に知っていただきたいと思います。

原口氏

次に安川先生お願いします。



安川氏

西郷と島津斉彬、薩摩藩が優れていたのは、新しい日本を見据えて、藩のあり方まで変えようとする、保守的な日本の中でグローバルな感覚を持っていたことです。

強いだけでは生き残れない、時代の変化に合わせて改革していくということを持っていたことが優れていきました。

北前船とともに見直され、皆様の知るところになればと思ったのが石河確太郎です。奈良出身の方は、斉彬公に召し抱えられた時、1861年に始まったアメリカ南北戦争が原因でイギリスは必ず綿花が不足するので、薩摩藩にいち早く綿花貿易を提案し、斉彬公の集成館事業に大きく貢献しました。ただ一士の言ふことを聞いて、薩摩藩がいち早く日本初の機械紡績所を設立しており、このフットワークの軽さにも薩摩藩の凄さを感じます。石河確太郎は、本間郡兵衛という本間家の方と一緒に日本初の株式会社の創立を目指しました。本間郡兵衛が酒田に戻った時、スパイと勘違いされて幽閉され、客死したこと、残念ながら頓挫しました。もしこれがなければ、日本初のカンパニーは南州商社だったのではないかでしょうか。

私が生まれ育った横須賀も港町ですので、この港と港を作り出す文化に非常に興味があります。横須賀にもアメリカでも日本でもない独自の文化があり、港を通じて入ってきています。豊かな文化を形成した北前船も高く評価されるべきです。確実に日本には大日本海時代があったことが、この北前船寄港地フォーラムを通じて、皆様の知るところになるのではと思います。

原口氏

那覇から中国の福建へ朝貢船が行っていました。2年に1回は行き、朝貢国の中では琉球王国は大変優遇されていました。越南国とか李氏朝鮮は、5年に1回、10年に1回でした。徳永先生、その朝貢貿易の実態をお願いします。

徳永氏

朝貢貿易ですが、長崎が貿易一港だと学校教育では習ってきました。ところが、実際は琉球口（薩摩口ともいう）、対馬口、松前口を通して、それぞれの藩が交易することが許されていました。なぜ俵物かですが、世界で80%の銀が日本とメキシコで採られ、銀が少なくなってきた。1700年代はじめ、このままでは日本の金銀銅が失われて貨幣がなくなり大変なことになると、鉱物資源に代わるものとして俵物が出てきました。俵物



は、毎年生産して売っても、来年も再生産できるので、鉱物資源から海産物に代わったのです。もちろん、中国側の需要が見込めることがあったからといえます。

それから鹿児島の町は、波除けに雁木（防波堤）というのを置いており、その内側は波が静かでしたので、港町の機能を備えていました。城下町が手狭になり、町が足りなくなれば、雁木と陸地を結んで築地を作り、城下町が拡張されていきました。

斉彬公の経済的観念ですが、海には多くの帆船が活動しているのを見て、帆を作ればすごい財源になると考えたのではないでしょうか。まだ軍艦という思想さえない時代に、これから日本は艦船に大砲を積む軍艦を造って日本全国に売ろうと、財源確保を考えていたことが斉彬公言行録にあります。

もう一つ、明治維新で大久保が日本をリードした時に、西洋文化に近づくために、外国のトップレベルの外国人を雇い、日本人の学者を育てましたが、これは斉彬公がすでにやったものです。集成館事業での動力・水をどう利用するかなど、基本的なことを鹿児島の文化で行ったから鹿児島は日本的には最先端の近代工業を成し遂げました。それを見て、実践したのが大久保の明治維新だという気がします。

原口氏

北海道開拓史の殖産興業は、集成館が原形と聞いたことがあります、松尾先生いかがですか。

松尾氏

開拓の時に、北海道は宝藏で、金銀銅や森林資源も豊富なのでうまく活かせといわれています。幕末の薩摩藩



は、相手はイギリスやフランスですから、薩摩だけ強く豊かになっても意味がないと、日本全体のことを考えて動いていました。集成館事業の資料は、薩英戦争、西南戦争、太平洋戦争で焼かれて鹿児島にはほとんど残っていません。しかし、斎彬が薩摩藩だけ強くなつても意味がないと、他の藩の視察を受け入れ、技術者を派遣しましたので、佐賀、福井、愛媛といった他県に資料が残り、それを使っています。いろんな所に影響を与えましたが、一番大きいのが北海道だと思います。



原口氏

昆布ですが、一番食べるのが富山、鹿児島、沖縄、中国で、海上交通があったことは明白です。糸満の旧正月では、家に炭と昆布のしめ縄飾りもあり、昆布なしでは過ごせない生活が琉球の庶民にもあったことが分かりました。

福田先生、大河ドラマ「翔ぶが如く」の放映後の加治屋町、偉人、維新ふるさと館のことをお紹介ください。

福田氏

私が勤務していた維新ふるさと館は、加治屋町にあります。加治屋町は明治維新で活躍した西郷・大久保はじめ、薩摩を代表する多くの偉人を輩出した町です。

しかし、明治維新を支えた重要な人物として忘れてはならないのは、島津久光や調所笑左衛門の存在とその役割です。久光や調所は、ドラマなどでは悪役的な描かれ方をされる時もありますが、久光の「政治的決断」、また、調所の交易を主とする「財政改革」なくしては、明治維新も実現しなかったといえます。このことを私たちは再認識すべきだと思います。

また、昔から鹿児島はどこの家庭にも越中富山の薬が入っていました。富山は水が大変綺麗だったことから製薬に適していたということですが、特に富山と薩摩の関係は深く、薬種や昆布、俵物などの交易に伴い薩摩組という組織まで作られ、薩摩の財政改革に大きな役割を果しました。こうした組織づくりも調所ならではの施策であり、薩摩組は交易のみならず、全国の様子を知る上

での情報源としての役割も果たしていました。

原口氏

徳永先生、調査された浜田などのことをお願いします。

徳永氏

長年、昆布などを調べてますが、どこに資料があるか分からぬ状態の時に、まず山陰の貿易港である浜田に行きました。浜田で、鹿児島の船がどこから来たか追いかけると（客船帖調査）、富山と新潟が浮かび上がっていました。特に富山の売薬業者、薩摩組ですが、九州組というのがあり、九州組の仲間に入れないのが薩摩組でした。富山では浄土真宗がメッカですが、薩摩では浄土真宗が禁止されていました。我々はよく越中富山の薬売りと言いますが、薩摩では言ってはいけないことで、八尾の薬売りという名前を使わないといけませんでした。

原口氏

最後に安川先生に締めていただきます。

安川氏

今日、「北前船と鹿児島」というテーマでしたが、本日いらっしゃった皆様の中には、なぜ鹿児島で北前船なのかと思われていた方が多かったのではないでしょうか。今は逆に、なぜ今まで鹿児島で北前船が語られなかつたのかという思いに変わっているのではと思います。

北前船がもたらしたものは物質的なものはもちろんですが、北前船の精神はまさに一攫千金の夢に命を懸けた、壮大な男のロマンだと思います。1回の航行で6千万円から1億円を売り上げたといわれており、命を懸けても、そこに夢を追う人達が多かったというところで、自己犠牲の精神で日本の商品市場を発達させたといわれています。

ただ、北前船は、様々な文化なども伝えました。出汁文化ですが、関西には北前船で北海道の昆布が来て、関東には黒潮に乗って鰯の出汁が伝わり、関西と関東で大



きく味の違いはありますが、これらも港と港が作り出した文化です。そして「ハイヤ節」です。九州が発祥といわれているハイヤ節ですが、島根に行くと「出雲節」、新潟では「佐渡おけさ」、津軽では「津軽アイヤ節」になり、芸能でも素晴らしい文化を伝えました。山形の紅花は染料となり、京友禅の美しい色を生み出し、リサイクルとして酒田に帰ってきて、今度は「雛」に変わるとということで、庄内ひな街道として庄内を美しく彩るという、豊かな文化が港と港で育まれました。薩摩藩は、惜しむことなく全国に知識や経験を全国へ伝えました。いいものはみんなで、そして日本を強く美しくしようという思いがあったのだと思います。港は、人と人が交わる所で、人と人が交わることが様々な化学変化を起こし、新しいものを生み出し、明治維新の原動力になったのではないかでしょうか。

結びになりますが、この北前船寄港地フォーラムが第29回ということで、肉の美味しい鹿児島で開催されるという意義を、非常に大きく感じています。今後、この寄港地フォーラムを通じて、新たな交流が始まることに期待します。私は、本日のパンフレットにも、北前船は様々な文化などを伝えた伝播船と書きましたが、伝播は非常にいい言葉だと思います。徳も伝播し、東北でも西郷隆盛を非常に敬愛する方が多いです。毎年、庄内の南洲会の方々は、2月に20人ぐらいで鹿児島の南洲神社を参拝されます。青森出身の笹森儀助という方は、奄美大島の龍郷町に南洲顕彰碑を建てました。日本は島国ですので、長い歴史の中で育んだ、港と港が結びつくことにより形成された独自の文化を、東京オリンピックが開

催され、訪日外国人が多く訪れるこの年に、日本人のアイデンティティ、文化を見つめなおすことを考えていかなければいけないと思います。

原口氏

北前船寄港地交流フォーラムは、新しい価値を生み出す、新しい価値の創造に繋がることが分かりました。徳永館長の西郷南洲顕彰館は、昨日、百万人入館のお祝いがあり、小学5年生が素晴らしい作文も披露してくれました。

最後に、北前船が、これから日本の舵取りをしてくださるワンチームとして、今日は青柳社長や磯田さんの話、そして「ハイヤ節」を堪能したいと思います。皆さんどうもありがとうございました。

司会者

出演者の皆様、本当にありがとうございました。鹿児島の歴史研究のオールスタークリアストともいべき皆様による大変興味深い話の連続で、あっという間の90分間でした。

北前船を通じて、物資だけではなく文化、精神も運ばれたということもよく分かりました。

今日の話に出てくる薩摩の姿は、あまり全国には知れ渡っていないような部分もあり、驚きもあったのではと思います。大変勉強になるパネルディスカッションを拝見させていただきました。





九州旅客鉄道株式会社
代表取締役社長

あおやぎ としひこ
青柳 俊彦 氏

皆さん、こんにちは。JR九州の青柳でございます。

本日は、「第29回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」が盛大に開催されることをお慶び申し上げますとともに、お呼びいただきありがとうございました。また、実行委員会会長の森市長、北前船交流拡大機構の浜田理事長のこれまでの努力が実を結んで、素晴らしい大会ができることを非常に嬉しく思っております。

北前船の話は磯田先生にお任せして、私からは九州で30年鉄道事業を行ってきたJR九州が、人流という、人ととの行き来を活発にし、九州を元気にしてきた話をさせていただきます。

まずは、私も鉄道マンですので、九州の鉄道、日本の鉄道の話です。最初の鉄道は1850年代にロシアやアメリカから蒸気機関の模型が持ち込まれ、將軍に進呈されたと聞いていますが、実物大の列車が走ったのは、教科書では1872年の新橋－横浜の鉄道です。実は1865年に長崎でグラバーが植民地に持っていく予定の列車を走らせており、現在でも市民病院の近くに石碑が建っており、日本で初めて鉄道が興されたことになります。坂本龍馬が龜山社中を作ったのがこの1865年ですので、当時、長崎に龍馬がやってきて、この煙を吐いて走る蒸気機関車を見たのではと想像しながら歴史を楽しんでいます。

九州の鉄道ですが、JR九州ができる100年前の1887年に鉄道会社が設立されました。当時から九州は災害が多く、水害で筑後川の建設中の橋が流されて、結局、博多－久留米の開通ができず、1989年に手前の鳥栖市から暫定開業しました。1907年には、富国強兵で民間の鉄道が国有化されました。九州鉄道株式会社は上場を取りやめたのですが、2016年に96年ぶりに再上場できました。1987年には国鉄が民営分割されてJR九州ができ、2011年には新幹線が全線開業しました。

JR九州ですが、32年前に国鉄から民営分割されてでき、資本金160億円、社員数は当初は15,000人で、現在は8,500人です。40社ほどグループ会社があり、

全部合わせて17,700人で運営しています。1987年、単純連結の推定で売上高が1,527億円、うち鉄道の売上が1,080億円くらいで、鉄道が約82%でスタートしました。昨年度の決算が売上高4,400億円、経常利益665億円で、売上ベースでは鉄道34.4%、鉄道以外の事業が65%を超えたところです。代表的なJR東日本ではこれが6対4の割合ですので、九州で鉄道以外の事業に一生懸命取り組んできたことが分かるかと思います。

九州新幹線の完成は、九州の鉄道にとって大きな出来事でした。平成16年に部分開業、平成23年には全線開業と、おそらく先の方から作った新幹線は九州だけです。当時、九州らしさを出そうと、今までにない新幹線を作ろうと開業しました。新幹線は当然、スピードが速いので、九州の博多と鹿児島がこれまでの4時間近くが、部分開業で2時間12分、全線開業により1時間19分で結ばれました。九州内が早くなつて当然、便利になつたのですが、それ以上に新幹線が一つに繋がったことが大きな効果でした。それまでは、博多まで新幹線が来ていましたが、鹿児島から同じ新幹線で新大阪まで行けるようになり、時間的な効果もさることながら心理的な効果が大きく、人の行き来が多くなりました。博多－熊本は、2009年に140%、1.4倍になって以降、毎年数字が伸びています。熊本－鹿児島は、2004年の部分開業により、1日の利用者がそれまでの3,800人から8,800人が利用されるようになりました。実に2.3倍です。部分開業で2.3倍になった熊本－鹿児島ですが、関西圏との直通運転によりさらに1.6倍に増えたのが実情です。

多くの方が新幹線を使って行き来をするようになりましたが、東海道新幹線や山陽新幹線と比べると、ビジネスのお客様だけではなくなかなか成り立たないのが九州新幹線です。我々は、ビジネスだけでなく、観光のお客様にも新幹線を使ってもらおうと、新幹線とD&S列車を同時に提供しました。部分開業した時には南九州で、全線開業の時は熊本を中心にD&S列車を作りました。D&S



はデザイン・アンド・ストーリーの略です。デザインだけでなく、いわゆるご当地列車というストーリー性だけでもなく、両方を兼ね備えたものを提供しようと、水戸岡銳治さんと一緒にデザインを、地元の皆さんと一緒にストーリーを組み立てて、お客様に楽しんでいただいている。客室乗務員と地元の皆さんのおもてなしで、さらに感動を高めようと努力してきました。

「ゆふいんの森」は、現在の11本のうち、一番長く走っているD&S列車で、博多から湯布院までを結んでいます。従来の列車からかけ離れたメルヘンのような形の列車ですが、おかげさまで大変人気を博しています。新幹線の部分開業前から走っており、最近ではインバウンドのお客様に多くご利用いただいている。

「指宿のたまた箱」は、部分開業の時から走り出した、ご当地鹿児島の列車です。白と黒のツートンカラーで、たまた箱伝説をモチーフにし、指宿に到着してドアが開くのと同時にたまた箱の白い煙が出てくる、ちょっと凝ったところがあります。地元の指宿商業高校の皆さんが、おもてなしの課外授業をされ、どうやったらお客様に来ていただいて満足してもらえるかと「茶いっぺ運動」のようなことをされています。ある時、豪雨で指宿のたまた箱が脱線し、すぐ近くのこの高校の皆さんがあ毛布を持って救助に行かれ、私は大感激し、すぐに感謝状を持ってきました。その時、生徒会長が「指宿のたまた箱は僕らの仲間です、ファミリーです」、「大変な時には我々も一生懸命頑張ります」と言ってくれまして、涙の出る思いでした。黄色のラックを着た指宿市役所の皆さんも、昼休みに到着する指宿のたまた箱をお迎えされています。

次に「或る列車」というD&S列車ですが、九州鉄道が国有化された頃の1906年に、当時の九州鉄道の社長が、豪華列車を作りたいと、アメリカの車両メーカー

に発注しました。2年後に出来上がったのですが、国有化されていたため実際に走ることができませんでした。この幻の豪華列車を原信太郎さんという方がスケッチされ、横浜にある原鉄道模型博物館の入口に展示しています。それを私が見まして、次のD&Sはこれだと思って作ったのがこの列車です。マニアの中でこの幻の列車を「或る列車」と呼んでおり、この名前を付けました。豪華列車にふさわしい内装ですが、それ以上に豪華なのは、青山のシェフに中で食べていただくスイーツを監修していただき、当社のメンバーをそのレストランに修業に行かせ、この列車の食事を提供するようにしました。長崎や大分を中心に、年間200本程度運行していますので、ご乗車いただければと思います。

12番目のD&S列車「36 ぶらす3」を先日発表しました。九州は、大陸を除いて世界で36番目の大きな島ということを知った当社のメンバーが、36にちなんでアイデアを盛り込みました。今年の秋から走り始め、木曜日に博多を出発し、木、金、土、日、月と5日間運行します。それぞれの日に7つのストーリーを地元の皆さんと一緒に用意します。5日間で35のストーリーに、実際に旅行するあなたのストーリーを足して、36にしていただきたく、この数字に決まりました。ぶらす3は、実際に乗車される方、地元の皆さん、我々JR九州のスタッフが彩りを添え、39、すなわちサンキューという感謝を込めました。先日、列車の起工式を行ったところで、秋の運行開始にご期待いただければと思います。

多くの方が今日期待をされている「ななつ星in九州」の話です。2013年に運行を開始し、今年で7年目です。1万5、6千人のお客様にご乗車いただき、これからも運行を続けます。豪華列車というジャンルが「ななつ星in九州」できましたが、自分を見つめる、パートナーを見つめる、新しい人の出会いを感じる、そういった

時間を提供できないか、優雅な時間をいかに過ごすか、をテーマにこの列車を作りました。それにふさわしいステージ、車両、ラウンジなど、どうやってお客様に満足していただかを検討しました。機関車も含め、水戸岡さんのデザインが究極ということで、豪華な天井を貼り、車内に木製の家具を置き、落ち着いた時間、流れる車窓を見ながら時間を優雅に過ごしていくことを経験してもらえばと思いました。九州の匠の皆さんも協力しようと、十四代柿右衛門さんも、癌に冒されていましたが、14部屋全て違う柄の手水鉢を作っていました。大変残念ながら手水鉢を車両に付けた頃にお亡くなりになりましたが、気迫のこもった作品が車内の各所に展示されていますので、ご乗車の時には、こういったところも楽しんでいただきたいと思います。もう一つの大きな売りは、地元の皆さんとのふれあいです。毎回見送りに来てくれる地元の少年達や皆様は本当にありがたいことで、7年になりますが、今でもお迎えされています。乗車されている方も手を振るだけで心と心がふれあう感動を味わっていただいている。時には列車を停めて、地元の皆さんとホームの上で交流しています。

次に、最近のインバウンドの状況を紹介します。順調に外国人が九州を訪れています。JR九州もインバウンドに取り組もうと、九州レールパスを発売しました。そのものの発売は1993年に釜山航路を作ったことがきっかけでしたが、現在のようにFITで来られる東アジアの皆さんに対するレールパスとしては、2008年に用意し、3日間、5日間、北部九州、全九州、最近は南九州のレールパスを作りました。インバウンドが、残念ながら2016年に大きく減っているのは熊本地震のためです。この年は30万枚売り上げる勢でしたが沈ん

でしまい、近年は10%から20%ずつ伸びし、今年は28万枚を超える状況です。2010年頃は、約80%が韓国からでしたが、今では台湾、香港、中国本土から多くの方に来ていただいている。特に中国はビザの緩和により多くの方が訪れていますが、コロナウィルスが心配で、一刻も早い復活を望んでいます。九州という言葉を知らない方がほとんどなので、JR九州としては、九州という形で7県をPRしていきたいと思います。

最後に、駅ビルや不動産といった鉄道以外の事業も行いながら、まちづくりの企業を目指そうと、この30年頑張ってきました。今年の秋には宮崎で駅ビルの開業、来年の春には熊本で開業、2023年には長崎で駅ビルの拡張を考えています。博多駅周辺のさらなる成長のために、博多駅の上空を使った開発もぜひとも成し遂げたいところです。

鉄道を使った人流といいますか、人の動きとお互いのコミュニケーションを図りつつ、九州を元気にしていこうと取り組んでいます。それがJR九州のあるべき姿と掲げているように、安全とサービスを基盤に、九州、日本、アジアの元気を作るグループとして今後とも頑張っていきます。誠実に、成長と進化を遂げよう、地域を元気に、とこの3つの言葉を常に自分に言い聞かせています。

この北前船のように、ヒト、コト、モノの交流とみなし、観光、生活産業をぜひとも活性化させ、九州を元気にしていきたいと思っています。これからも皆さんと一緒にになって、九州を元気にしていきますので、ご協力よろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。





歴史家

いそだ みちふみ
磯田 道史 氏

皆様、こんにちは、磯田道史でございます。

大河ドラマ「西郷どん」の監修で時々鹿児島に来ていたのですが、今日は「なぜ薩摩は強い国か」という話で、北前船の講演ですので、西郷や大久保の話はあまり出てきません。薩摩という藩を全国の他藩と比較したり、経済や流通の面から鹿児島が強国化していった要因を分析したいと思います。

幕末の藩、何で北前船で薩摩強国化の秘密の話になるのかというと、米以外の収入、税収が、実は藩にとって、強くなれるか財政的にまともになるかの鍵となります。幕末のGDPを出せる藩が一つだけあり、薩長同盟を結んだ相手、長州藩でだけです。ある程度地域の人達が、行政が末端まで行き届いている上に、識字率が高く、生産量だけでなく、生産のために必要な費用の報告が可能な藩は長州藩だけです。しかも藩がそういう意思を持っていないとできません。長州藩は「防長風土注進案」という経済調査を行っていて、これを我々歴史学、特に社会経済史をやる者は、江戸時代の経済段階を見る上では非常に重要です。それで長州藩は面高が36万石で、薩摩藩77万石は糀なのです。糀は半分になるから實際には40万石くらいです。この石高は、米の生産力に仮託しており、本当の米の取れ高とは結構離れている面もあります。薩摩は水田面積の割には他の事で食べられているので、人足を出せる自信があり、77万石とされました。

長州藩は36万石ですが、1840年代に、全ての藩の中での生産を足し上げると152.5万石分の生産があることが判明しました。そのうち農業生産高は80万石、非農業の生産が72.5万石です。つまり半分近く農業以外の生産が伸びています。ここが大切なところで、江戸時代の年貢は高いと思われるかもしれません、裏作の麦は二毛作では無税で、租税負担率からすると割と安く、農業では38.6%です。一方、農業ではない部分、例えば酒や大工など全部入れた場合の租税負担率は1.3%です。要するに江戸時代の領主は土地領主なので、そこから年貢を取り立てる権利は持っていますが、農業以外のことで地代以外のものを取り立てるのが正当でないと考

えられました。これが前近代の政府の限界なのです。非農業生産高からどのように収入のポケットを得るかが、幕末の藩が強国化するかどうかの極めて大事なポイントだったのです。

ここで有利だったのが西南の諸藩です。要するに温かい所ほどいろんな産物は取り易い面があります。松前藩を除いては、北海道の産物を領有している藩はありません。それで米沢藩などは寒いので辛く、蝋を作ろうとしても、早い速度で薩摩や熊本の蝋の木は伸びてしまい、値段で競合すると、いつも負けてしまうことがあります。

この産物の専売は、領内で何か作らせて京や大阪へ運んで行けば売れるので、買い上げて、株式会社薩摩藩とか総合商社土佐藩みたいなことをやる藩が、お金を貯めていけるのです。これを当時、産物まわしといっており、主要な航路がこの北前船です。

薩摩藩は、長崎あたりで積み替えるなどして、琉球そして中国にまで販路を広げていました。北海道の昆布など俵物産品を積んで、中国内陸部の人達がバセドー病になると海草が食べたいということから販売しました。薩摩藩の優れた点というのは、情報収集が得意で、すぐ自分の行動に移すところでした。薩摩藩の郷中教育も実利的で行動的です。

ところが、産物まわしは、産物があるだけでなく、出来的藩と出来ない藩がありました。圧倒的な経済的先進地、識字率も高い地域は、強い領主はいないので、自然に市場経済が出来上がっており、世界史でいたら、イギリスやオランダやベルギーのような場所です。

一方、薩摩は、産物はありましたるが中央市場が遠いので、良いものがあつても農民が自分で担いで売りに行くようなことはなく人口密度も低いので、専売はやり易く、砂糖のような産品を持った場合には圧倒的に有利でした。

東北の藩は、やりたいのだけどそれほど良い商品がなく、米沢藩みたいに何か織物を作るとかしかありません。塩田をやろうにも太陽の光があまりないので、長州藩や

岡山のあたりがやる塩田に勝てるはずがないという苦しみがあるわけです。

北前船は、主に「にしんかす」を積んできており、この「にしんかす」が農業生産の前提である地域が、瀬戸内沿岸です。江戸時代の年貢は、定免制といって大体一定の比率で取ると決めています。だから農民は頑張って、二毛作など収穫量を増やしたり、面積あたりで稼げる綿を作りました。綿は肥料で取るといわれるよう儲かるのですが、植えたらあっという間に土地が瘦せるので、米を収穫した後に、北海道から大量の魚肥、特に「にしん」を持ってきて木綿を作りました。工業化の前提条件が出来上がったのが、1870年頃です。この裏作の木綿で稼ぐ者に対して、領主はほとんど年貢で回収する術を持っていなかったので、いわば優遇税制みたいなものです。

江戸時代は農業中心の社会のように思いますが、農業部門からだけ税金を取って、商業部門から税金を取る仕組みがなく、いわば300年商業優遇税制をやったのです。あの時代で豊かに生きようと思えば、税の軽い豪商になるのが一番良いです。大正の始めくらいまで、こういう姿が続いていました。家畜の糞なんかよりもずっと魚かすの方が施肥の効率が良く、最初は千葉のイワシなども持って来たのですが、やっぱり北海道のニシンで、この肥料を運ぶ北前船の母港が各地にできてきました。

中央市場から遠く隔離されているから「専売」「産物まわし」ができたので、幕末の雄藩は西南地域に登場しました。後の明治維新の基を作る藩が出てくるのは当然のことです。専売をしている点と、もう一つ重要な点は、ヨーロッパ、外国の窓口が西側になるからです。新しい政治のやり方を受け入れる藩が九州、四国の土佐などに多いということです。

しかし、薩摩藩は弱点も抱えていました。ルビンジャーの研究によると、明治17、8年頃の鹿児島の女性の識字率は3%で、男性は30%です。同時期の岡山は、男性60%、女性40%です。都に近い滋賀では、男性は

90%の識字率を持っていました。明治になって、日本は、日清戦争で勝った中国からの賠償金などを得て、小学校を建て、全国の識字率を上げ、地域差をなくしますが、江戸時代における薩摩の識字率は非常に低いものでした。都からの距離が遠い青森や薩摩は、識字率の低い地域で、面積当たりの稻の収穫量も低く、粗放的な農業が行われていました。

また、二毛作のできない福島と福井を結んだ線より北側の諸藩は貧しくなりがちでした。一方、どんどん人口が伸びるのは、この二毛作が出来るこのラインより南側で、薩摩は実は凄く人口が伸びたのです。要するに長州や佐賀は温暖で、米麦二毛作が可能なわけで、土佐などは二回お米が穫れたりしました。

一方でかわいそうなのが北関東です。浅間山の噴火まであって、土地は酸性になり、幕府の領地は、この東国の大作に向かない地域にあるので、奥羽列藩同盟がいくら頑張ろうとしても、一旦は半分近くまで人口の減ったことのある東北の藩の経済力が持つわけではなく、財力のある西南雄藩にはかなわなかつたというのが実情だったのです。

北前船はなぜ北からやって来るのかというと、この二毛作で大変お金を貯めた農民と商人が、近畿から瀬戸内海地域にいるからです。彼らが贅沢なものや、ニシン、綿を売るための肥料を北海道から持ってこさせました。薩摩藩はその中でどうやって稼げば良いかの活路を外国に求めたわけです。

つまり北前船から昆布を買って来て中国へ売り、反対決算品が瀬戸内海から畿内の人達への砂糖です。この頃、瀬戸内とか大坂京都とかに、次から次へと砂糖を使ったお菓子が生まれてきました。砂糖は、奄美の人達には気の毒でしたが、専売にして、そのお金で昆布を買って、中国で売って、薩摩藩は儲けようしました。これが1840年頃の日本経済と薩摩藩の真実です。今の歴史の教科書には、当時の経済の基底構造がこういうものであったと書かれておらず、学校教育の場では語られませ



んが、社会経済史の研究者は当然ながら知っています。

識字率ですが、世界でどうだったのかというと、ペリーがやって来た頃の 1850 年頃は、スウェーデン 90%、プロイセン・ドイツ 80%、スコットランド 80%、イギリス・イングランド 65 から 70%、フランス 55 から 60%、オーストリア・ハンガリー 55 から 60%、ベルギー 50 から 55%、イタリア、日本はだいたい平均をとったら岡山で 40%、イタリア 22 から 25%、スペインも同じで、一番低いのがロシア 5 から 10% で、薩摩はロシアよりちょっと良い状態です。チボラという研究者の研究です。

こういう庶民の識字率が低い社会では、絶対的な権威主義権力が生まれます。皇帝専制です。それで、ロシアの貴族や君主はフランス語が読み書きできます。薩摩の殿様もオランダ語がハイレベルで、藩士も漢詩漢文はよく読めました。しかし、薩摩の一般の庶民達は、字も読めず、他藩よりも文字を知りません。このある種の知識格差社会がこの薩摩藩の特徴だったと思います。藩主はオランダ語まで読み書きでき、藩士はちゃんと高度な教養を持っています。このエリート教育に先行している所が幕末になると政局を動かす担当部署、薩摩藩でも西郷どんの周りで動く人達です。寺島宗則や、外国の知識も豊かな五代友厚、こういった秀才達もいるわけです。

薩摩の下級武士たちは郷中教育で育ちました。この郷中教育を日本中に広めてほしいと思っています。郷中教育の中には、詮議といって「もし、こういうことになったら、おまえは、どうする？」と、子供に、起きてもいいことを考えさせ、対策案を答えさせる教育法がありました。この郷中教育や詮議の教育が実は薩摩藩の強みであり、幕末に薩摩藩が長州藩を出し抜き、会津藩もやっつけて、天下の薩摩藩になった理由です。

戦国時代は、薩摩だけでなく、各地でやっていたかもしれません。例えば、「親の仇、主君の仇、両方持つ者はどうしたら良いか」の薩摩藩士の模範回答は、「行き当たり次第に」と言うのです。仇に自然死されては元も子もない。出会ったら行き当たり次第に討つ。この現実的合理性が戦士の國・薩摩の強さの秘密でした。

このアリズムでもって、日露戦争までほとんどの将軍、東郷元帥なども普段から「もし、こうなったら、どうするか」を考えていたわけです。だいたい、事態が起きる前から答えを持っておけ、というのが、薩摩武士の教えでした。

薩摩では、こういう知恵を口頭で伝える実利的な教育を行っており、文字で頭が固くなっている本州の諸藩教育とはずいぶん違いました。そこが薩摩の面白いところです。この温暖な砂糖の専売があるので、江戸、上方へ売り、日本中央からみれば辺境であるからこそ藩が、雄藩になっていきました。一方では奄美、西南諸島の犠牲

も払うということになっていくわけです。

薩摩藩の強さですが、薩摩のような火山灰の地域は完全に水田農耕だけで生活できないので、狩猟や採集の文化が残ります。狩猟民は戦争に向いています。農耕社会のように毎年過去の先例慣習を延々と繰り返すよりは、どこに獲物という敵がいるか、すぐにそれを捕えるかというような情報重視の即応的な判断を求められる傾向が強くなるものです。

あと圧倒的なのが、この薩摩の地は、徳川幕府が唯一戦争で屈伏させられないかもしれない藩なのです。徳川家や豊臣秀吉は、国内で戦闘、一戦場にだいたい最高で集められるのが 20 万人です。20 万人で、100 万石前田家の兵員動力 4 万人を袋叩きにしたら簡単です。豊臣秀頼が交通の便の良い大坂で 9 万人で立てこもりましたけど、見事に袋叩きにしていますから、その半分以下の兵力しか無い前田家は、徳川家には降参です。一方、薩摩藩はそうはいきません。

僕は、宮之城に半月ほどいたことがあります。古文書「山崎御仮屋文書」を探りに、鹿児島の不思議な社会を、僕は 20 代の半ばに初めて見たのですが、ずっと鹿児島の人を観察していました。「けもんにいく」と聞いたら、買い物に行くという意味だったとか、鹿児島弁が分からないので、1 日に 5 回位、どこから来たか聞かれました。

薩摩藩は 10 万人で、しかもこれはありがたいことに後ろに敵がないのです。琉球はそんなに武張った国ではありませんので。「島津強いですね」と言ったら、悔しそうに豊臣秀吉が「ありやあ碁盤で言ったら隅っこだから守りやすい」と言った逸話があります。ここに 10 万人の郷土達が砦で構えて待っているわけです。長州藩、薩摩藩も同じで、人口はひたすら増えて行き、だいたい 1720 年から 1850 年までの約 130 年で 1.5 倍にしています。維新の底力です。経済的に非常に恵まれていました。鹿児島の人は親切なので、無理な頼み事をしちゃいけないと思っています。全国で一番親切かもしれません。でも割に実利的で分に努めており、それで琉球を領有しているところがあります。

薩摩藩が雄藩になったのは、これまでの通説では、天保改革に成功したからです。1800 年頃、調所広郷というお茶坊さんの賢い人が出てきて、借財整理をし、西洋の文物を取り入れて、それで国際知識が他の藩とは違って飛び抜けて、それで強くなったというのですが、もうちょっと早いと思っています。

人材登用を徹底して行ったモデルが隣の熊本です。学校で秀才を選び抜いて、殖産興業に徹底してやっていく行政の姿を隣の熊本が作り、米沢藩が真似をし、それを学習する為に佐賀藩と薩摩藩が一番早くやり、その次が会津藩と長州藩です。非常に強い熊本の影響があります。天保よりも一世代前の 1800 年頃から、普通の藩と普



通でない藩に分かれてくる様子を感じます。

最近の学会の動向は、この1750年あたりから、何かちょっと前と違うことが起きているのではと、例えば、藩の学校で優秀な人を選び抜くとか、官僚制度を凄くやるとか、殿様への崇拝を凄くやるとか、こういうことをやる藩がたくさん出始めます。

維新の中心にならない普通の岡山藩とかでは特徴があります。藩が学校を作りますが自由登校なのです。藩学校に来たい人だけ来てねということですが、普通でない藩は違います。

有名なのは佐賀です。全員通え、寄宿舎にも入れというのは水戸藩です。佐賀藩は、成績を付けて、成績が悪いと禄高を減らすことまでしたわけです。長州藩の場合は全員通え、成績を付けます。全部藩主がその成績を見て、成績の良い者は吉田松陰だろうが、久坂玄瑞だろうが、身分が低くても政治に影響力をもち、藩は取り立てます。薩摩藩もやんわりとそういう人材主義を入れているように思います。むしろこの熊本に学んだのは、専売制度、産物まわしとかの手法です。

熊本藩は、6人の奉行を今の内閣の閣僚のようにして、分職といって担当を決めたのですが、当たり前のように思いますが、これまでありませんでした。また、125人も学校の先生を作り、徹底して藩士に授業をし、勉強のできる者をこれから出世させると言いました。それで、熊本の役人には、文学がない者はいません。巨大な学校を建て、水道橋を作りました。すると、大阪の熊本藩蔵屋敷に米が溢れ、米蔵に入らないから、米蔵の前に垣根を築いて積んでいました。それを役人達が驚いた古文書も目にしています。それで、熊本藩は何をしたのですかと、薩摩藩はすぐに熊本に1年以上留学させて、この行政の様子を学ばせてもらったのが始まりです。

同じようなことを長州藩も行い、明倫館という学校を作り、学校の門前に投書箱を作って、目安箱で政治提案をここで入れ始めました。これが理屈っぽい長州藩の雰

囲気を作っています。しかも毎月学生の出席・成績を記して、江戸に送って、殿様の耳に入れると書いてあり、禄高を持っていなくても1番を取った人は凄い発言力を持ちます。だから下級武士が動かす長州藩が生まれてきました。

薩摩に潜入するのは難しいことでした。今のお金で23万円くらいの見せ金がないと入れてもらえないとも書いてあります。病気になった時に、自分の国まで戻る路銀がないのに入ってはだめというのです。しかもいったん入ると、庄屋から庄屋へと、この村に泊まっていいという証明書の紹介状がないと移動できないので、ほとんど薩摩藩の領内を見て回るのは難しいことでした。

薩摩の人は親切で、親切で字の読めない女の人が散々に「もうちょっと食べて下さいね」とか言って、薩摩おじょが凄くお世話してくれたと思うのです。薩摩の雰囲気がよく出ていて良いと思います。ただ、農民には辛い藩で、あらゆる藩を見た出石藩の儒学者が、賄賂も行われているし、厳しい政治が行われているとも書いています。だから「西郷どん」の前半部分で、薩摩藩はみんな悪い政治をしてないといったかもしれません、他藩からみても結構厳しい政治はあったのです。

あと驚いたのが、124箇所も外城などがあり、郷士がものすごくいっぱい、500人、1,000人ずつ住んでいました。全員で10万人の薩摩の武士（郷士）がいました。10万人の薩摩の人達が守っていたので、20万人で徳川幕府が攻めても、楽に勝とうと思うと3倍の兵力30万人は要るのです。幕府は所持する20万人の兵力で、薩摩を攻め滅ぼせるかもしれないけれど、幕府の体力が弱っている時は、攻め滅ぼす自信がないという、薩摩は幕府にとって始末に負えない藩なのです。しかも、薩摩藩は、篤姫など大奥の中にも人を送りこみました。おそれ多いですが、薩摩は朝廷を操縦することもある程度できました。江戸時代は、五摠家筆頭の近衛家が、宮

家の親王よりも上座に座り、天皇に並ぶくらい力が強いのですが、この近衛家にも薩摩藩島津家は代々、ご正室を入れました。近衛家の家司（家老）の地位ものっとって、薩摩弁を喋っている薩摩藩士にして、近衛家の薩摩化を進めました。ですから、朝廷でやっていることは薩摩に情報筒抜けです。大奥は握っている、朝廷も実質近衛家に繋がっている、10万の兵は持っている、これはもう潰せるはずがないのです。これが薩摩の強さの秘密でした。

この膨大な郷士ですが、昔、宮之城に行ったら、公務員とか教員の方々の多くが、麓あたりに住んでいる郷士のご子孫で士族でした。調べてみたら鹿児島県は、士族率が27%で日本最高の比率で、実数で東北6県の士族全部と釣り合います。薩摩、鹿児島県は、維新で功があり、郷士が多いので、他藩だったら士族にしないような人たちも、みんな士族に大量編入したということです。

薩摩の産物、サツマイモはことのほか国益になっています。水田がないのに、食を足らせるには、非常に効果があると気づきました。これが実は薩摩藩の秘密で、そこに天才児、島津斉彬が現れました。

王政復古のクーデターも行い、鳥羽・伏見の戦いに挑むわけです。この時、幕府は15,000人、薩長土佐は5,000人で、幕府は最新のフランス式陸軍歩兵も持っていましたから、もし上手に戦うと薩摩たちに勝った可能性もあります。しかし、薩摩藩の西郷や大久保は幕府をおびき寄せとて、4ポンド山砲を先に浴びせ掛けるという作業で幕府を倒せると思いついたのです。抽象的なことは考えません。薩摩に抽象なし、薩摩の発想は常に具体的というのが、この薩摩的思考の強さだと思って

います。このときの西郷の作戦書が残っていますが、もし勝った場合は何する、負け色になった場合は、偽の天皇鳳輦（有栖川宮）まで用意していました。幕府側にもこの時の作戦計画書、軍配書という物が残っておりますけど、「どこを占領せよ」とだけで、他の指示はないのです。作戦の柔軟性も何もあったものではありませんでした。

薩摩軍の先鋒の大将、樺山資紀は、竹竿の棒を一本持って、道の真ん中に線を引いて、薩摩の兵達に、「あの線を一步でも幕府軍が超えたら撃たっしゃい」と言いました。薩摩軍は賢いですので幕府の行列をよく見ており、どこに大砲があるかを見て、照準はそこに合わせて「撃たっしゃい」と言った瞬間、大砲の玉がピューッと飛んで、この弾丸が破裂して、幕府軍の大砲の砲車はひっくり返り反撃不可能でした。苦戦もありましたが、戊辰戦争が始まっています。

薩摩兵の戦死率7%、一方、一番最新の銃器スペンサー銃を持っていた佐賀の武雄隊は戦死率0.6%でした。薩摩兵は、非常に勇敢で士気が高いので、エンフィールド銃を使ってしばしば「チェスト！」と突撃を敢行しました。それで死傷率が7%にもなって、薩摩人は精強なのですが、戦死率は佐賀藩武雄兵の10倍も高くなっていたというのも、戊辰戦争における薩摩藩の現状でした。

また、薩摩藩の強みという点では、海軍の艦船を諸藩の中ではすば抜けて多く持っていたとの話もデータを示してお話をされたのですが、時間が来たようです。今日は、薩摩の強さを経済を中心にお話しさせていただきました。ありがとうございました。





学校法人津曲学園 鹿児島国際大学
国際文化学部教授

せん けいしょう
戦 慶勝 氏

残念ながら、大連から来ていないというお話を伺っていますが、大連生まれの大連育ちで、鹿児島の美味しい水を21年間飲み続けて、鹿児島の火山灰も21年間吸っている私が来ています。

私の報告するテーマは、「異文化コミュニケーションのメリット」です。

まず、なぜこのようなテーマにしたか、ご説明します。

今から35年前に日本に留学に参りました。当時は文科省の国費留学生として京都大学で学んでいました。見ますところ、60代以上の方々が結構いらっしゃいますが、私が使った奨学金の中に、おそらく皆様の税金が含まれていると思います。申し訳ありません。

異文化コミュニケーションがなければ、おそらく今日の私はいないかもしれません。

文化的なアプローチを、いかに有用にするかは、その人間同士の経験や知識を共有しなければなりません。同じ言語を持った日本人同士でも地域の違いが存在するので、それぞれの違いを理解し、相手の立場に立って考える必要があると思います。

その意味でいえば、北前船は日本人同士の経験また地域の共有に留まらず、日本と外国、特に中国との相互理解、相互信頼の育成にも間接ながら役に立ったと思います。

文化環境が違えば、それぞれお互いに期待する行動様式が違うかもしれません。鹿児島に21年間在住していますが、日本語でいろいろ日本人とコミュニケーションをとっています。その中で歴史、習慣、エチケット、ガバナンスなどの違いによって誤解など、しょっちゅうありました。その意味で、文化的特徴を理解しなければなりません。中国と日本も文化が違いますので、異文化コミュニケーションをする場合、互いに配慮しないといけません。

例えば、ニュース番組の順位をみても、トップダウンの中国の社会では、事柄の重要性よりも、関与した人物の方が重要視されます。中国では習近平さんが出席した

番組は非常に大きく取り上げられます。それに対して、東日本大震災の際に、総理大臣はあまりテレビに出てこずに、むしろその事柄が重要視されました。どっちが良いか悪いかと言う問題じゃなくて、行動パターンの違います。中国のようなマスコミの報道パターンは、欧米では多分通用しないだろうと思います。

先入観なしの異文化接触や異文化理解を実現するために、留学生が重要な役割を担っています。私もかつて留学生でした。日本人の行動様式や行動パターンを外国に紹介したり、外国人の価値観、それから行動パターンを日本に紹介するために、互いに留学生を受け入れることを欠かしてはなりません。

私は大学で教鞭をとっていますが、東西文化の融合と地域社会の貢献を建学精神としている私の鹿児島国際大学も、若者のコミュニケーション能力の向上に貢献しています。留学生の派遣や受け入れをしています。今は、5つの国と地域から157名の外国人留学生が在学し、経済学、福祉社会学、国際文化学を専攻しております。

鹿児島国際大学の外国人留学生の受け入れは、すでにメリットをもたらしています。大連の日本工業団地は、何十万の地元の人間を雇用しており、本学を卒業した学生は、そこへの就職や、鹿児島にも就職しています。城山ホテル鹿児島にも就職しています。それから、肺炎の件で、本学の留学生会は、武漢市にマスクを1万枚買って寄付しました。先週の1月30日に送り、役に立つだろうと思います。

自分の文化を相手に紹介する場合に、押し付けては駄目です。また、相手の文化を生半可に理解しても、文化コミュニケーションの壁を乗り越えることはできません。

ここで、二つの人物について、お話ししたいと思います。先日、坊津へ遊びに行き、鑑真和尚のことを思い出しました。

鑑真和尚は、仏教の戒律だけではなくて、様々な漢方薬を日本に持ち込みました。日本医学の先駆者としても

尊敬されています。日常生活に欠かせない砂糖の作り方、味噌の作り方を持ち込みました。私は歴史学の専門家ではありませんが、文献にそう書いてあります。私もそのまま引用しています。中国から日本に文化が流入したという例です。

もう一つは、中国女子バレーの基盤は大松博文という人物が作ったのです。つまり鑑真和尚が行った1200年後、日本女子バレーの大松博文監督は、当時の周恩来首相の要請を受けて中国の女子バレーの指導にあたりました。そのおかげで1981年、初めて中国のチームが世界のチャンピオンとなりました。そのあと5連覇も達成しました。

5度の渡海に失敗して、6度目の渡海でやっと日本に辿り着いた鑑真和尚が日本に戒律を伝えたおかげで、現在の日本の仏教があるといわれています。それと同じように、大松博文さんが日本流の訓練方法を伝えたおかげで、現在の中国女子バレーがあるといつても過言ではありません。

これらの事例は、異文化コミュニケーションのメリットとして捉えていいのではと思います。

留学生は、異文化コミュニケーションの架け橋です。かつて渡海技術が未熟だった時代に、多くの日本の若者が海を渡って、先進国である中国の隋や唐から先進技術や文化、政治制度を学びました。もちろん仏教の教典や漢字をたくさん持ち帰りました。

皆さんのが気なく使っている1万円、1億円、1兆円の「万」「兆」は、新しい概念です。留学生達が日本を持って帰ってきました。

もちろん文化融合は一方的なものではありません。日本人は漢語を受け入れて自在に使い分けて、それに基づいて、さらに和製漢語を数多く作り出しました。

20世紀のはじめ、中国の若者は、欧米や日本で先進技術を学びました。日本留学組は、和製漢語をたくさん持ち帰りました。例えば、金融、証券、取消、哲学、これらは当時の中国人留学生が日本から新しい概念として中国に持って帰りました。明治時代に日本人が創意工夫

して作った漢字語は、中国語に定着しています。このパンフレットの協賛企業の中に、日本ガスという企業がありますが、そのガスという表現は、日本人はもう漢字は使いません。しかし、その「瓦斯」という漢字は中国語に定着していて、毎日何気なく使っています。多くの中国人は、これは日本人が作ったものだと分からぬでしょう。

中国は、今、日本の最大の貿易パートナーであり、日本も中国の重要な貿易パートナーです。両国の関係は、相手がいなければ生きていられないくらいに緊密になっています。それにも関わらず、相手に対する誤解や偏見に満ちた考え方を持っている人が多いです。相手に対する不信感を取り除くためには、的確に情報を伝えることや人的交流が大切です。これからの中日関係は、相互の理解、信頼の如何にかかっています。

かつて、犬猿の仲のドイツとフランスは、戦後になって相互理解を深めるため、若者に互いの国を訪問させ、交流プロジェクトを立ち上げたりして、何十年も実施されてきました。今は互いに支え合うパートナーとなっています。

経済交流、文化交流、人的交流は、国と国との関係悪化を防ぐ防波堤になります。例えば、2012年、尖閣諸島の問題で中国で暴動が起こりましたが、大連では何もありませんでした。なぜかといいますと、日系企業に何十万人も就職しているので、彼らは日本のこと多少知っているのです。そこまでやる必要はないと考えて、行動しなかったのだと思います。

中日関係は、ドイツとフランスのような関係を築けない理由はどこにもありません。のために、もっと経済交流、文化交流、人的交流を拡大させねばなりません。

私も皆さんの税金を使って留学した一員として、これからも尽力したいと思います。ご清聴ありがとうございました。





国土交通省観光庁 観光資源課長

かわだ あつや
河田 敦弥 氏

皆さん、こんにちは。観光庁観光資源課長の河田と申します。本日はこのような場をいただきまして、ありがとうございます。

交流拡大・産業振興に向けた観光政策ということ、中国・大連の方を中心としているということで、特に九州与中国の関係にフォーカスした内容で用意しています。残念ながら、このフォーラムに、新型コロナウイルスの関係で、中国の方がお見えいただけないということです。

観光庁長官からもありましたが、私ども観光庁の政府の一員として、あらゆる対策を今講じています。

まず観光の現状ですが、昨年、日本に来られた外国人のお客様は3,188万人で、7年間で3.8倍になっています。これは世界的にも非常に珍しくすごく急成長しています。

その理由は、いくつかありますけれども、大きいのは周辺の中国をはじめとする東アジア、東南アジアの国々からの海外旅行者が非常に増えていることです。

そういう中で、日本に来られる、日本を目的として選ばれる方が増えており、それに向けて日本政府もいろいろなことをしてきたということだと思います。

中国からは、昨年ですと3,188万人のうちの950万人の方が来られています。その次にヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアから来られた方が400万人もいらっしゃいます。

実はこういったアジア以外の国の方々もたくさん来ていただこうと、以前から我々力を入れています。

長官の挨拶にもありましたが、昨年2019年、日本人の海外旅行者が初めて2,000万人を突破しています。これも政府の大きな目標の一つがありました。

今起こっています新型コロナウイルスの関係でいうと、2003年にSARS、イラク戦争といろいろありました。この当時は、まだ日本人の海外旅行者数が、インバウンド、つまり海外から日本に来られる方よりもずっと大きい時期でした。

今、非常に影響が心配されているインバウンドに関して、この当時、500万人ちょっとぐらいの時期でして、その2003年から、ビットジャパンキャンペーン開始など、国でインバウンド施策を本格的に始めた時期にあたります。

推移はまだまだ予断を許さない状況ですけれども、インバウンドやアウトバウンドも、イベントリスクとかいわれるよう、いろいろな事象の影響を受け易いといわれます。

他方、SARSのケースもそうですが、過去の事例に照らすと必ず回復基調に戻りますので、今回もなるべく早く回復に向けて目指していくことになると思います。

いずれにしても非常に海外旅行の市場が増えていくので、中国のお客様やアジアの方々を引き続き日本で積極的に受け入れていく必要があると思っています。

人数とあわせて重要なのが収入です。要は外国人が日本に来て、いくらお金を使っていただいているのかといいますと、昨年は4.8兆円で、6.5%増でした。

さきほど3,188万人（対前年比2.2%増）といいましたが、消費額はそれ以上に伸びています。

昨年のトピックスとしては、ラグビーのワールドカップが日本全国がありました。ラグビーワールドカップの開催時に日本に来られた外国のお客様が消費した単価は、この時期だけ捉えると昨年の10月から12月の3か月間ですが、爆買いといわれた5年前を上回る消費額が記録されたということです。ラグビーワールドカップの際に来日された方は、先程申し上げたヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアの欧米豪が多かったわけですが、そういった方々の消費の影響もあって、単価が大幅に伸びました。さらに上げようというのが、我々の今の施策の中心です。

九州で一番大きいのは韓国、中国、さらに台湾、香港で、90数%を占めています。ちなみに、昨年韓国からのお客様が大きく減っていますので、その前の時点のト

レンドだとご覧いただければと思います。

さらに各県ごとに、泊まった方の国籍別の調査をしたところ、九州全体でみると、韓国が45%くらいです。

鹿児島県についてみると、一番多いのは香港で、次に韓国、台湾、中国となっています。

欧米豪ですが、全国平均13.1%からすると、まだまだ九州全体でも3.8%ですし、鹿児島は若干九州全体より大きいですがまだ4.7%で、もっと伸ばしていくける余地があると思います。

九州域内の旅客流動に関しては、九州北部で外国人の方の移動が多く、鹿児島はもちろん多く来られていますが、その周遊の仕方をもっと工夫して、伸ばしていくける余地があります。

特に、インバウンド向けにも非常な人気なデザイン・アンド・ストーリー列車といいまして、JR九州の「ななつ星in九州」をはじめとする列車、また、西鉄など他社もこういった列車を観光資源として、インバウンドの方に高付加価値で販売されているのが特徴的で、こうしたところを伸ばしていくべきだと思います。

今、観光庁は文化庁と一緒に、文化観光を進めていくとしており、この通常国会に新しい法律も出す予定で

す。まさに北前船は日本遺産で、文化と交流人口ということを結び付ける取り組みだと思いますが、全国各地に、美術館、博物館などといつもいろいろな文化財があります。例えば、JR九州であれば、鉄道車両は新しいものですが、駅でいうと、鹿児島では嘉例川駅そのものが登録文化財になっています。そういうものを観光資源としてもっと活用していくと、これからも進めていきたいと思っています。

以上、簡単ですが、私からの報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。





鹿児島相互信用金庫
海外・貿易相談所 所長

むらた ひでひろ
村田 秀博 氏

鹿児島相互信用金庫の村田でございます。私は、鹿児島と海外の企業間のビジネスマッチングの業務を20年、特に中国東北部の大連市との経済交流を数多く行っています。

今回、大連代表団の来訪が叶わず残念ですが、この大連市を例としまして、中国・大連等との経済交流の現状と拡大ということで、話をさせていただきます。

まず鹿児島相互信用金庫は、1990年より貿易ミッション、通称「TOBO会」を31回催行し、うち18回で中国を訪問し、その中で大連市を11回訪問しています。

県内の参加企業は424社に上り、様々なビジネスが成立しました。この経済交流の成果により、2010年11月には大連と経済貿易協力協定を締結し、今年で10年目の節目となります。

大連の皆様は日本人のことを良く知っており、日本語を話す人材も多く、様々な交流がしやすい所です。今まで私は中国国内30都市以上をビジネスで訪問していますけれども、長年にわたり繋がりを保持しているのは大連市だけです。

私どもは、県内中小企業を海外に派遣し、独自の個別商談を開催していますが、大連市の貿易促進委員会がいつも100社以上の中国企業を募ってくださり、効果的な商談を行うことができています。つまり鹿児島の企業1社につき5社以上の中国企業と商談ができるということになっています。他にも大学や、人材派遣、医療機関、マスコミとの連携も進んでおります。

大連からの鹿児島への輸入ですが、以前より飼料用の稻藁の取り扱いが多く、2018年の輸入額は25億8千万円です。畜産の盛んな鹿児島県が日本一の取り扱いとなっています。

近年では、鹿児島県産品の輸出が盛んです。長年の取り組みにより成功事例も増えてきました。木材の輸出、養殖ブリの輸出、焼酎、醤油、納豆などの加工品の輸出

が挙げられます。木材は、杉、檜、丸太の輸出が大部分で、端材の輸出も行われました。志布志港からの原木輸出は10年連続日本一、2019年は365,840m³ですが、一次產品ですので、価格競争、他県攻勢に晒されています。

昨年、中国への構造材、いわゆる柱の輸出が可能になったこともあります。今後は付加価値のある加工品、住宅建築としての輸出拡大を考える時期にきています。

養殖ブリ等の水産品は徐々に輸出が増加中です。養殖ブリ生産日本一の東町漁協は、海外輸出の10%が中国であり、それが新型肺炎の影響で止まっているとのことでした。早く鎮静化して欲しいものです。

ポイントとしては、相手のニーズに応えるため、輸出者が多種多様な魚種を提供する仕組みづくりも必要となります。中国の消費者は、例えばブリの白身ばかりではなくて、マグロの赤身も食べたいと、一つの魚種だけでは満足しないところですので、多種多様のものを供給する仕組みも必要だと思います。

県産加工食品の輸出は、焼酎が代表とされます。鹿児島は焼酎が名産です。適量であれば健康にも良いといわれますが飲みすぎたら駄目です。県内蔵元が焼酎試飲会を開催するなど、海外販路拡大の努力を続けています。中国には、蒸留酒の白酒、醸造酒の紹興酒といった国酒がありますので、輸出は右肩上がりとはいいませんが、焼酎好きの中国人が増えているような実感もあります。現地にいる日本人だけでなく、中国人に飲んでもらうはどうしたら良いかが最大のポイントです。飲み方、瓶、ラベルのデザイン、アンテナショップ、焼酎に合った食材の提供等の工夫が取り組まれています。ワインと同じように、辛口、甘口とか、重口、軽口を裏ラベルに表示させる方法も、一つの手かもしれません。皆さん、日本で黒伊佐錦の4合瓶は見たことがないと思いますが、中国の方は、飲み切りで良いという傾向があるのだそうです。結局、5合瓶より4合瓶の方が値段が安くできますが、1本飲めば満足する傾向もあるようです。鹿児島



の方が運営をされている上海の焼酎バーもあり、アンテナショップのような役目も果たしています。

今後、輸出増加が見込める商品として牛肉が挙げられます。昨年12月、日本産牛肉の輸入禁止令が解除になります。今年は20年ぶりに中国への輸出再開が見込まれています。鹿児島県は畜産県ですので大いに期待されています。中国産の稻藁を食した牛肉が中国へ輸出されることにもなります。

すでにいち早く情報を得た大連のバイヤーが昨年5月に来訪し、各生産者を回りました。日本一の生産者にも回られました。この先、豚肉、生鮮野菜、果物の輸出解禁にまで波及すれば、一大消費地が生まれます。日中関係が良好な今、先んじてその準備をしておくことが大事です。鹿児島県の2018年の農業算出額は全国2位の4,863億円です。肉用牛の頭数は全国2位の約34万頭、豚の頭数は全国1位の約127万頭で、生鮮野菜、果物も豊富に生産されています。現在、日本からは、リンゴとナシしか輸出できません。それが緩和されると、農林水産品の中国輸出は、2018年1,330億円ですが、格段に増加すると考えられます。

鹿児島からも毎年多くの中小企業が中国の展示会に出展しています。その一例としまして、毎年大連で開催される大連日本商品展覧会を紹介します。鹿児島市の積極的なバックアップを受け、鹿児島市の輸出チャレンジ企業グループが出展しました。大連の人々は日本製品の良さをよく知っています。この展覧会は商談も展示販売もでき、三日間の会期でいつもほとんど完売します。県産品で人気があるのは、醤油、黒酢、菓子、麺類などです。健康指向が高いことが伺えます。その中でも醤油が特に人気でした。

日本食品は、安心安全、子供が食して大丈夫な世界です。ただし、このような展覧会で焼酎はなかなか手に取ってもらえない。試飲もしたがりません。他県のブースでも、焼酎、日本酒を展示販売していますが同じようです。そこで打開策を見つけました。打開策は焼酎

の100mlの小瓶です。これなら中国の皆さん、手に取って説明を聞き、買って行かれます。商品のサンプルとしても渡せます。「飲んでよし贈ってよし飾ってよし」のキャッチフレーズを連呼して販売しますが、アルコールを商談販売する時の必需品です。中国人に飲んでもらう第一歩になると思います。

鹿児島市ブースには大連市の副市長、北前船交流拡大機構の浜田理事長が訪ねてくださり、プレミア焼酎の森伊蔵を置きました。私は森伊蔵など、たくさんの鹿児島ブランドの中国での第三者による悪意の商標登録を取り返す支援をしました。特に森伊蔵は10年かかりましたので、森社長とは特に親しくしています。将来の輸出を見据えて、森伊蔵を持ち込みました。そこで副市長が、「森伊蔵を中国に最初に輸出する時は、ぜひ大連にして下さい」という要請がありました。海外知的財産権の整備は重要であるということを認識していただければ幸いです。

以上、大連を中心にお話をさせていただきましたが、このような経済交流は大連以外でも、例えば東南アジア各国でも行われています。

北前船による昆布などの商品の広がり、フォーラムの広がりは、まだまだ先があると感じています。

私も中国ばかりでなく、ベトナム、タイ、ミャンマーなど東南アジア等も飛び回っていますけれども、もっと詳しく、海外経済交流について話をお聞きになりたいようでしたら、ぜひご連絡ください。

私の基調報告をこれで締めくくります。ご清聴ありがとうございました。

総括（閉会あいさつ）



公益社団法人日本観光振興協会
理事長

久保 成人 氏

総括及び閉会の挨拶というお役目をいただきました。私も磯田先生の話は面白く楽しく、かつ数字とエビデンスで語られて、非常に納得感がある勉強をさせていただいたのが感想ですが、このフォーラムを通じて、個人的に海という移動空間が持っている可能性や柔軟さを強く感じました。

先日、私はベトナムのダナン近郊にあるホイянという町に行ったのですが、ホイянは400年前は3,000人近い日本人が住んでいた日本人町がある所です。400年前は、船で相当な貿易が日本と当時のベトナム地域で行われていたということで、北前船交流拡大機構としても、今後のいろいろな夢が語れると感じた次第です。

今日は、鹿児島で開催されたことも踏まえまして、皆さんに一つ提案がございます。非常に有意義かつ重要なフォーラムだったと思いますので、29回を積み重ねて初めての試みですけれども、フォーラムの大会宣言を行いたいと思います。宣言文案を作りましたので読み上げます。

一 新型肺炎の影響は、日中の観光交流面にも暗い影を落としています。この困難に直面する中国の方々にエールを送るともに、いち早く事態が収束するよう、

フォーラムの参加者一同心から祈念しています。そして再び日本で、また大連、中国で再会できることを心より望んでいます。

- 一 本フォーラムでは、今後の交易を通じ、北は北海道から南は鹿児島、沖縄、中国まで結ばれていたことをあらためて確認することができました。このような歴史的な繋がりをも踏まえて、全国の自治体間の交流をさらに拡大、前進してまいりたいと考えます。
- 一 今回、本フォーラムに初めて参加していただいた沖縄では、火災で焼失した首里城の再建に官民を挙げて取り組んでいるところです。本フォーラムの参加者一同、一日も早く首里城が再び沖縄のシンボルとして勇壮な姿を見せる事を願っています。

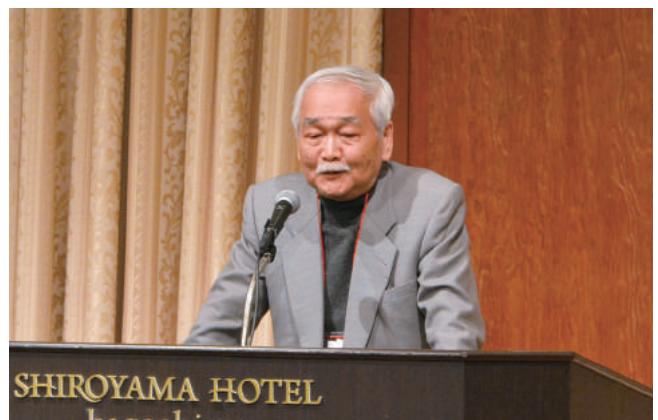
以上でございます。ぜひ、ご賛同頂ければ、拍手を頂きたいと思います。

(拍手)

ありがとうございます。初めてであります。これを大会宣言として本フォーラム全てのプログラムを終了します。

本当に長時間ありがとうございました。



















九州初のフォーラムを本市で開催

北前船寄港地フォーラムin鹿児島

【観光プロモーション課☎216-1344㈹ Fax216-1320】

**本市の歴史・文化を生かして
交流を行います**

「北前船」をキーワードとして、寄港地など関係の深い地域での「北前船寄港地フォーラム」を本市で開催します。

北前船は、本市を含む多くの地域の歴史や文化に影響を与えたといわれています。「フォーラム」では、このつながりを生かした新たな交流と魅力発信を行います。

2019年度開催予定の4市の首長による共同記者会見の様子

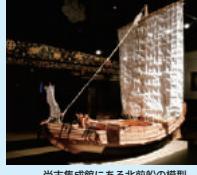
北前船と本市の関わりをぜひ知ってください！

尚古集成館 芸術員 山内 勇輝 さん

昆布が成し遂げた!明治維新

北前船とは、江戸時代から明治にかけて瀬戸内海や日本海の各地の港で商品を購入し、よその港で売買して利益を上げて来た商船です。

薩摩藩は寄港地ではありませんでしたが、江戸・後期・薩摩の財政が苦しい時期に、北前の船の運び昆布の輸入を手にし、琉球貿易を通じて満中國へ輸出していました。当時、甲状腺の病気が流行していた清では、その予防に良いとされた昆布の需要が高かつたのです。こうして得た利益で薩摩藩は財政を立て直し、明治維新につなげたといわれています。



第29回北前船香港地フォーラムに鹿児島市
明治維新の力・北前船で広がる交流の輪
～令和の新たな輪は海を越え～

2019年(令和元年)12月号

2019年(平成31年)4月号

2020年(令和2年)1月号

江戸から明治期にかけて日本海や瀬戸内海を結んだ商船「北前船」の理解を深める「北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」が来年2月2日、鹿児島市の城山ホテル鹿児島である。2007年から寄港地を中心に毎年開かれ、九州開催は初めて。

明治維新と北前船学ぶ

テーマは「明治維新の力・北前船で広がる交流の輪」。鹿児島は寄港地でないが、薩摩藩は北海道産の昆布やアワビを入手し、琉球経由で中国に輸出するなどゆかりは深い。

歴史家の磯田道史さんが「なぜ薩摩は強い国か」と題して講演。パネルディスカッション、観光庁や中国・大連市の関係者による基調報告がある。

2月2日、鹿児島市

午前10時半～午後5時45分。無料。昼食は各自。往復はがき、ファクス、メールに氏名、住所、年齢、電話番号を明記し、日本旅行鹿児島支店(〒892-0828、鹿児島市金生町2の14)に申し込む。1月15日必着。同支店=099(224)8315、ファクス同(226)8456、メールkagoshima_krtsumitate@nta.co.jp

南日本新聞 2019/12/08

18点が並ぶ。10日まで。1号館が開催されている。写真。江戸から明治にかけて大阪と北海道を結ぶ北前船を紹介するパネルなどを展示。南北各地の産物を販売した北前船が2日市内で開かれたのに合わせた。鹿児島市南日本放送、鹿児島県町会、津曲学園、全日本空輸株式会社鹿児島支店、日本放送協会鹿児島放送局、公益財団法人鹿児島観光コンベンション協会

北前船の歴史紹介

大波小波



江戸から明治にかけて日本海や瀬戸内海を結んだ商船「北前船」の理解を深める「北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」が来年2月2日、鹿児島市の城山ホテル鹿児島である。2007年から毎年開かれ、九州開催は初めて。

△とき	2020年2月2日(日)午前10時半～午後5時45分
△ところ	鹿児島市城山ホテル鹿児島
△内容	▽第1部パネルディスカッション 「北前船と鹿児島バナリスト」原口良氏(志學館大学教授)、徳永和喜(西郷隆盛顕彰館館長)、福田賢治(前維新のるさ美術館特別顧問)、松尾千歳(尚古集成館館長)、安川あかね氏(西郷隆盛研究家)
△講師	磯田道史氏(歴史家)、青柳俊彦氏(九州旅客鉄道代表取締役社長)、川井伸之(申込者全員の住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号を明記の上、往復はがきかファクス、メールにて892-0828、鹿児島市金生町2-14)日本旅行鹿児島支店(〒892-0828、鹿児島市金生町2の14)に申し込む。1月15日必着。同支店=099(224)8315、ファクス同(226)8456、メールkagoshima_krtsumitate@nta.co.jp
△申込方法	申込者全員の住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号を明記のうえ、下記までお送りください。 1月15日(水)必着。応募多数の場合には抽選。 △問い合わせ 日本旅行鹿児島支店=099(224)8315
△問い合わせ	日本旅行鹿児島支店(〒892-0828、鹿児島市金生町2-14)日本旅行鹿児島支店(〒892-0828、鹿児島市金生町2の14)に申し込む。1月15日(水)必着。 △問い合わせ 日本旅行鹿児島支店=099(224)8315

南日本新聞 2019/12/17

第29回 北前船寄港地フォーラム in 鹿児島

明治維新の力・北前船で広がる交流の輪 ～令和の新たな輪は海を越えて～

2020.2/2.

時 間 10:30～17:45
(第1部/10:30～、第2部/13:30～)
※昼食は各自でおとりください。

場 所 城山ホテル鹿児島
参加料 無料 ※申込みが必要です。
(詳細は下記をご覧ください)

基調講演 1 | 第2部 |

演題 D&S列車で九州を元気に!
講師 あおやぎ としひこ
青柳俊彦氏
九州旅客鉄道株式会社
代表取締役社長

基調講演 2 | 第2部 |

演題 なぜ薩摩は強い国か
講師 いそだみちふみ
磯田道史氏
歴史家

申し込み・お問い合わせ

往復はがきかファクス、メールで、申込者全員(2人まで)の住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号を明記のうえ、下記までお送りください。

往復はがき宛先・お問い合わせ先
〒892-0828 鹿児島市金生町2-14
(株)日本旅行鹿児島支店
TEL:099-224-8315

FAX: 099-226-8456
メール: kagoshima_krtsumitate@nta.co.jp
締切: 1月15日(水)必着

*応募多数の場合には抽選。1/24(金)までに当選を通知します。
※お問い合わせに関する個人情報は、本フォーラムの案内以外には使用いたしません。

「北前船」とは?

「北前船」は江戸から明治にかけて日本の物流を支えた商船です。財政が苦しかった薩摩藩は、「北前船」が北海道などから調達した昆布などを入手、琉球を経由し、中国に輸出するなど財政を立て直し、明治維新につなげたと言われています。このように「北前船」は鹿児島をはじめ、全国各地の歴史・文化に多大な影響を与えたました。

あなたもわくわく
マグマシティ
鹿児島市

南日本新聞 2019/12/20
2020/01/06

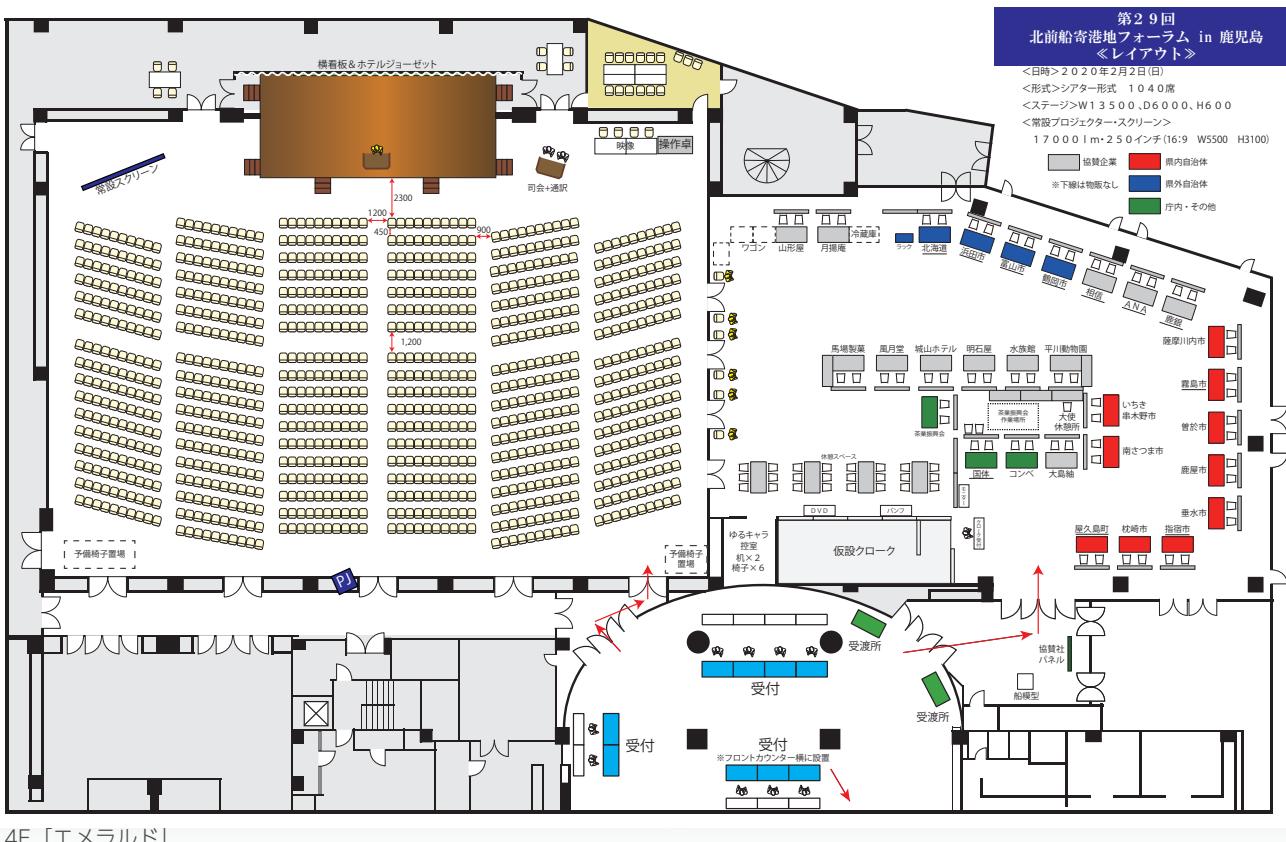
南日本新聞
2020/02/03

第29回 北前船寄港地フォーラム in 鹿児島

40

ポスター 1,000 部作成、チラシ(市民向け)4,000 部作成

会場レイアウト



「第29回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」実行委員会会則

(名称)

第 1 条 本会は、「第29回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」実行委員会（以下「実行委員会」という。）と称する。

(目的)

第 2 条 実行委員会は、江戸時代から明治期にかけて活躍した「北前船」の寄港地等が連携し、広域にわたる地域の活性化を図り交流を深めるため、北前船寄港地フォーラム（以下「フォーラム」という。）を鹿児島市で開催することを目的とする。

(事業)

第 3 条 実行委員会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) フォーラムの開催に関すること。
- (2) その他前条の目的達成に必要な業務に関すること。

(構成)

第 4 条 実行委員会は、別表に掲げる委員をもって構成する。

(役員)

第 5 条 実行委員会には、次の各号に掲げる役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 2名
- (3) 監事 1名

(役員の選任)

第 6 条 会長は、鹿児島市長とする。

2 副会長は株式会社南日本新聞社代表取締役社長及び株式会社南日本放送代表取締役会長とする。

3 監事は、公益財団法人鹿児島観光コンベンション協会事務局長とする。

(役員の職務)

第 7 条 会長は、実行委員会を代表し、会務を総理する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。

3 監事は、実行委員会の事務及び会計を監査する。

(役員の任期)

第 8 条 役員の任期は、実行委員会の解散の日までとする。

(オブザーバー)

第 9 条 実行委員会にはオブザーバーを置くことができる。

2 オブザーバーは、必要に応じて会議に出席し、意見を述べることができる。

(会議)

第 10 条 会議は、必要に応じて会長が召集する。

2 会議は、会長が議長となり、次の事項について、審議、決定する。

- (1) 規約の改廃に関すること。
- (2) 事業計画及び予算に関すること。
- (3) 事業報告及び決算に関すること。
- (4) その他重要な事項に関すること。

3 実行委員会は委員の過半数で成立する。ただし、委員がやむを得ない理由により会議を欠席するときは、当該委員を選出した団体から代理人を出席させることができる。

(経費)

第 11 条 実行委員会の経費は、負担金、協賛金及びその他の収入をもって充てる。

(決算)

第 12 条 実行委員会の会計報告は、フォーラム終了後、3ヶ月以内に監事の監査を受けて実行委員会の承認を得るものとする。

(解散)

第 13 条 実行委員会は、事業の完了報告の承認をもって解散する。

(余剰金及び欠損金)

第 14 条 実行委員会が解散するときの収支決算において、余剰金及び欠損金が生じたときは、実行委員会で協議のうえ処理する。

(事務局)

第 15 条 実行委員会の事務を処理するため、事務局を鹿児島市観光交流局観光交流部観光プロモーション課に置く。

(補足)

第 16 条 この会則に定めるもののほか、実行委員会の運営に必要な事項は、会長が別に定める。

付 則

この会則は、令和元年6月24日から施行する。

第29回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島 実行委員会名簿

■委員

(所属五十音順、敬称略)

役職名	所 属	役 職	氏 名
会 長	鹿児島市	市 長	森 博幸
副会長	株式会社南日本新聞社	代表取締役社長	佐潟 隆一
副会長	株式会社南日本放送	代表取締役会長	中村 耕治
委 員	鹿児島県町村会	会 長	伊集院 幼※ (大和村村長)
委 員	学校法人津曲学園	理事長	津曲 貞利
委 員	全日本空輸株式会社 鹿児島支店	支店長	西 祐一郎
委 員	日本放送協会鹿児島放送局	局 長	竹添 賢一
監 事	公益財団法人 鹿児島観光コンベンション協会	事務局長	榎林 繁

※ 令和2年2月25日付で 森田俊彦 南大隅町長に交代

■事務局

有村 隆生	(鹿児島市観光交流局長)	
成尾 彰	(鹿児島市観光交流部長)	
奥 真一	事務局長	(鹿児島市観光プロモーション課長)
山室 真樹	事務局次長	(鹿児島市観光プロモーション課推進係長)
有得 彩代子	事務局員	(鹿児島市観光プロモーション課推進係主任)
飯田 慎也	事務局員	(鹿児島市観光プロモーション課推進係主任)

※ 運営業務を株式会社日本旅行鹿児島支店に委託

フォーラム開催にご協賛いただいた企業・団体

(株)鹿児島銀行、(公財)鹿児島市水族館公社、城山観光(株)、全日本空輸(株)、日本ガス(株)、鹿児島相互信用金庫、(株)島津興業、(株)西部防災、(株)フタバ、(株)南日本総合サービス、(株)山形屋、九州旅客鉄道(株)、(公財)鹿児島市公園公社、(公財)鹿児島まちづくり土地区画整理協会、合名会社明石屋菓子店、南海食品(株)、日本航空(株)、(一社)鹿児島県建設業協会鹿児島支部、鹿児島県港湾漁港建設協会、(株)C S S、(株)大広九州、(株)野崎美工舎、(株)風月堂、本場大島紬織物協同組合、(有)馬場製菓、いちき串木野市、指宿市、鹿屋市、霧島市、薩摩川内市、曾於市、垂水市、枕崎市、南さつま市、屋久島町

ご協賛ありがとうございました。

また、県内外からフォーラムにご参加いただきました多くの皆様、開催にご協力いただいた関係の皆様方に心から感謝申し上げます。

「第 29 回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」実行委員会

第 29 回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島 報告書

2020 年 3 月

編集発行

「第 29 回北前船寄港地フォーラム in 鹿児島」実行委員会
(鹿児島市観光プロモーション課内)

※ 無断転載・複製を固く禁じます。

第29回

寄北
フオーラ
in 鹿児島乙
港前地船

明治維新の力・北前船で広がる交流の輪

～令和の新たな輪は海を越えて～

